

下総町長稻葉遺跡

—主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書IV—

1994

千葉県土木部
財団法人 千葉県文化財センター

しも ふき なが いな ば
下総町長稻葉遺跡

—主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書IV—



1994

千葉県土木部
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

利根川を北に望む下総町は、古くから自然環境に恵まれ、数多くの遺跡が分布していることで知られています。

千葉県土木部は、新東京国際空港周辺の道路整備の一環として、隣接する成田市と下総町とを結ぶ主要地方道成田下総線の道路改良事業を計画しました。千葉県教育委員会は、同事業地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県土木部をはじめ、関係諸機関と協議を重ねて参りました。その結果、路線内にかかる遺跡については、やむを得ず発掘調査による記録保存の措置をとることになり、財団法人千葉県文化財センターが調査を実施することになりました。

このたび、下総町内に所在する長稻葉遺跡の整理作業が終了し、報告書として刊行することになりました。古墳時代後期の集落遺跡のほかに、古墳時代終末期の方墳、江戸時代の六十六部聖による経塚などが複合する遺跡です。本報告書が、学術的な資料としてはもとより、郷土の歴史への理解を深めるために、より多くの方々に活用していただけることを願っております。

最後に、発掘調査から報告書刊行にいたるまで、いろいろ御指導いただいた千葉県教育委員会をはじめ、千葉県土木部、千葉県香取土木事務所、下総町教育委員会、地元関係諸機関の御協力に厚くお礼を申し上げるとともに、発掘調査および整理作業に協力された調査補助員の皆様に、心から感謝の意を表します。

平成6年3月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 奥山 浩

凡　　例

1. 本書は千葉県土木部による主要地方道成田下総線建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査から報告書作成にいたる業務は、千葉県土木部の委託を受け、文化庁ならびに千葉県教育委員会の指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが行った。
3. 本書に収録された遺跡は長稻葉遺跡（香取郡下総町名木字木挽崎158ほか）で、遺跡コードは341-005である。
4. 第2図に用いた地形図は国土地理院発行の佐原西部、下総滑川1/25,000である。
5. 本書は調査部長天野 努、調査部長補佐深澤克友、班長三浦和信の助言のもとに主任技師萩原恭一が編集した。
6. 2章1節の縄文土器・石器は技師高柳圭一が分類・実測・原稿執筆・写真撮影を行った。
7. 旧石器時代石器は技師新田浩三が実測・原稿執筆を行った。
8. 発掘調査から報告書刊行にいたるまで、下記の諸機関や方々から多くのご協力とご助言を得た。記して感謝いたします。

千葉県教育委員会、千葉県土木部道路建設課、香取土木事務所、下総町教育委員会。

本文目次

序 文

凡 例

本文目次

挿図目次

表 目 次

図 版 目 次

序章	1
1 節 調査にいたる経緯	2
2 節 調査の概略	2
3 節 遺跡の位置と歴史的環境	4
1 章 遺構	7
1 節 弥生時代の堅穴住居	9
2 節 古墳時代の堅穴住居	10
3 節 古墳	22
4 節 塚およびそれに伴う埋葬土壤	26
5 節 道路状遺構	28
6 節 溝状遺構	28
7 節 陥し穴状遺構	28
2 章 遺物	31
1 節 縄文土器・縄文時代の石器等	32
2 節 弥生時代住居出土の土器	40
3 節 古墳時代住居出土の土器	40
4 節 古墳出土の土器	56
5 節 その他の遺構およびグリッド出土の土器	56
6 節 金属製品・石製品	58
7 節 土製品	58
3 章 まとめ	63

挿図目次

第1図 成田下総線内遺跡分布図	3
第2図 長稻葉遺跡と周辺の遺跡位置図	5
第3図 長稻葉遺跡全測図	6
第4図 SI 2・SI 11住居実測図	9
第5図 SI 1・SI 3・SI 4住居実測図	11
第6図 SI 5・SI 6住居、SI 4・SI 5・SI 6カマド実測図	13
第7図 SI 7・SI 8・SI 9住居、SI 7・SI 9カマド実測図	15
第8図 SI 10・SI 12・SI 13住居、SI 13カマド実測図	17
第9図 SI 14・SI 15住居、SI 14・SI 15カマド実測図	19
第10図 SI 16・SI 17・SI 18住居、SI 16カマド実測図	21
第11図 SX 3墳丘平面実測図、土層断面実測図	23
第12図 SX 3横穴式石室実測図	24
第13図 SX 4実測図	25
第14図 SX 1・SX 2実測図、石碑実測図	27
第15図 SA 1・SA 2・SD 2実測図	29
第16図 SD 4・SK 1実測図	30
第17図 押型文土器文様復原図	33
第18図 繩文時代遺物出土状況図	34
第19図 繩文土器（1）	35
第20図 繩文土器（2）	36
第21図 繩文土器（3）	37
第22図 石器実測図	39
第23図 SI 11・SI 1・SI 3出土土器実測図	41
第24図 SI 3・SI 4出土土器実測図	43
第25図 SI 4・SI 5・SI 6出土土器実測図	45
第26図 SI 6・SI 7出土土器実測図	47
第27図 SI 8・SI 9出土土器実測図	49
第28図 SI 10・SI 12・SI 13出土土器実測図	51
第29図 SI 14・SI 15出土土器実測図	53
第30図 SI 16・SI 17・SI 18出土土器実測図	55

第31図 SX 3、その他の遺構およびグリッド出土の土器	57
第32図 金属製品・石製品実測図	59
第33図 土玉実測図（1）	60
第34図 土玉実測図（2）	61

表 目 次

第1表 住居構造一覧	67
------------	----

写 真 図 版

- 図版1 遺跡周辺航空写真
 図版2 遺跡遠景（北側から）、遺跡遠景（南側から）、遺跡近景
 図版3 繩文包含層全景、SI 1全景、SI 2全景
 図版4 SI 3全景、SI 3貯蔵穴遺物出土状況、SI 4全景
 図版5 SI 5全景、SI 6全景、SI 6カマド周辺遺物出土状況
 図版6 SI 7・SI 8全景、SI 7遺物出土状況、SI 8貯蔵穴遺物出土状況
 図版7 SI 9全景、SI 9カマド周辺遺物出土状況（1）、（2）
 図版8 SI 9・SI 10全景、SI 11全景、SI 12全景
 図版9 SI 13全景、SI 14全景、SI 15全景
 図版10 SI 15カマド遺物出土状況、SI 16・18全景、SI 17全景
 図版11 SX 1調査前全景、SX 1土層断面、SX 2全景
 図版12 SX 3全景、SX 3主体部検出状況、SX 3前庭部遺物出土状況
 図版13 SX 3主体部全景、SX 3主体部裏込土壊断面D-D'Sec.、南西側、北東側
 図版14 SX 3主体部奥壁、SX 3主体部南西側側壁、SX 3主体部玄門
 図版15 SX 3主体部全景、SX 3主体部閉塞状況、SX 3主体部掘形
 図版16 SX 4全景、SD 2・SA 1・SA 2全景、SD 4全景
 図版17 繩文土器（1～44）、繩文土器（45～85）
 図版18 繩文土器（85～126）、繩文土器（127～152）
 図版19 押型文土器
 図版20 SI 11、SI 3出土土器
 図版21 SI 4、SI 5、SI 6出土土器
 図版22 SI 6、SI 7、SI 8出土土器

図版23 SI 8、SI 9、SI 10、SI 14出土土器

図版24 SI 14、SI 16、SI 17、SX 3出土土器

図版25 金属製品、石製品

図版26 土玉（1）、土玉（2）

序 章

序 章

1 節 調査にいたる経緯

千葉県土木部では、成田市周辺の交通量の増加に伴う道路網整備の一環として、主要地方道成田下総線建設事業を計画した。この道路が計画された成田市北部から下総町にかけての地域は埋蔵文化財が多く所在する地域である。このため、成田下総線の建設に先立ち、千葉県教育委員会では千葉県土木部道路建設課と慎重な協議を重ねた。その結果、路線内に所在する埋蔵文化財については記録保存の措置がとられることになり、財團法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することになった。これらの遺跡のうち、成田市内に所在する遺跡については2冊、下総町内に所在する遺跡については1冊の合計3冊が刊行されている。

2 節 調査の概略

(1) 発掘調査

【昭和62年度】

調査期間：昭和62年7月1日～7月10日

調査面積：確認調査 上層120m²／1,200m²

発掘担当者：主任調査研究員 永沼律朗

組織：調査部長 堀部昭夫、部長補佐 岡川宏道、班長 矢戸三男

【昭和63年度】

調査期間：昭和63年6月1日～11月30日

調査面積：確認調査 下層48m²／1,200m²

本調査 上層1,200m²、下層0m²

発掘担当者：主任調査研究員 鳴田浩司

組織：調査部長 堀部昭夫、部長補佐 古内 茂、班長 矢戸三男

(2) 整理作業

【平成4年度】

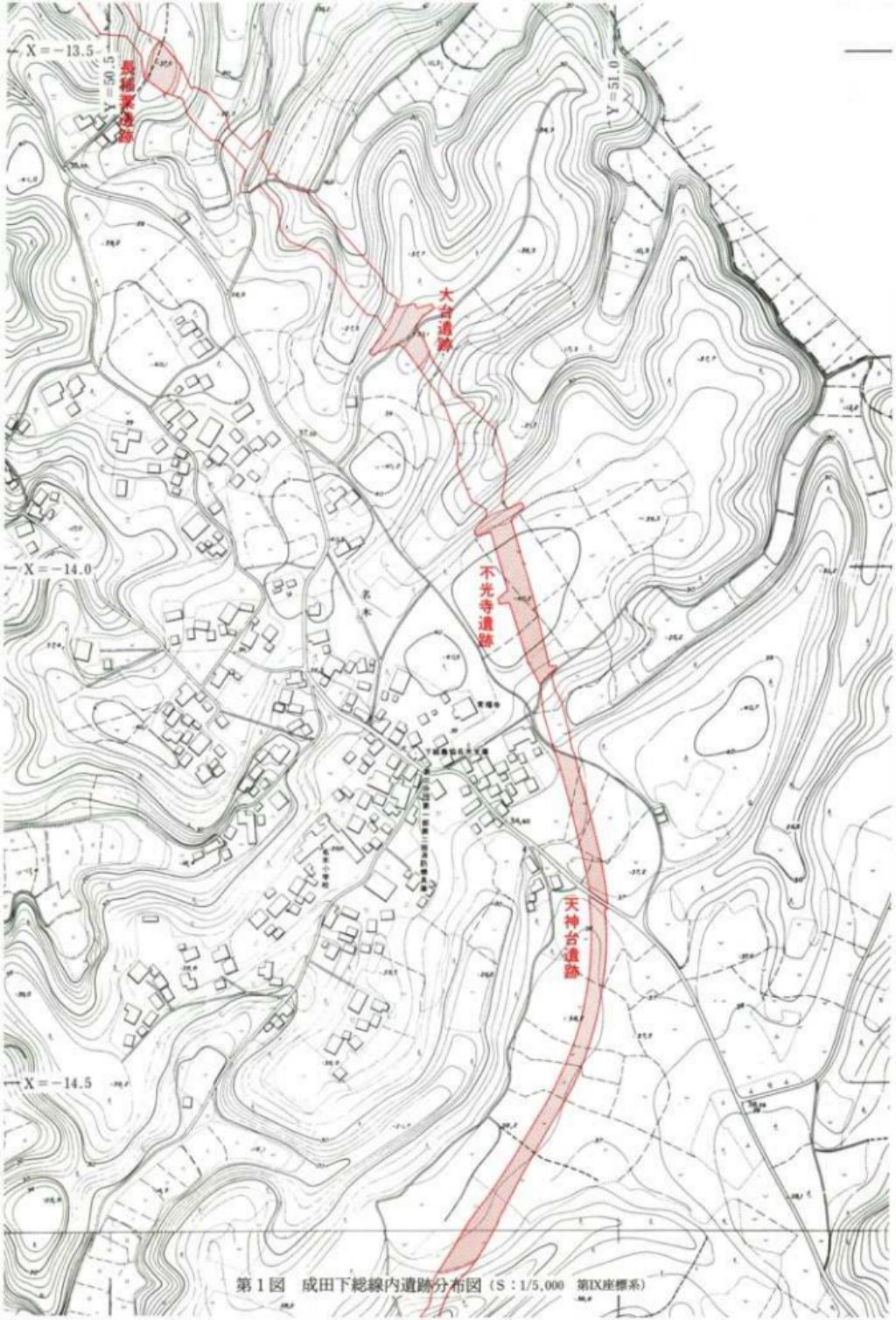
整理期間：平成4年11月1日～平成5年3月31日

作業内容：水洗・注記の一部から原稿執筆まで

整理担当者：主任技師 萩原恭一（全期間）、技師 高柳圭一（平成5年2・3月）

組織：調査部長 天野 努、部長補佐 深澤克友、班長 三浦和信

【平成5年度】報告書刊行のみ



第1図 成田下総線内遺跡分布図 (S : 1/5,000 第IX座標系)

3 節 遺跡の立地と歴史的環境

長稻葉遺跡の所在する下総町は、千葉県北部の中央やや東寄りのところにある利根川に面した町である。利根川は西から東に流れており、川に面した部分は低地が細長く広がり、その南側には下総台地が迫っている。台地から利根川に向かって小さな川が幾本か流れ込み、台地はそれに伴う細長い谷によって分断され、その支谷からはさらに細かな支谷が無数に台地に入り込んでいる。長稻葉遺跡は利根川の開拓平野に近い南の台地上にあり、東西両側に利根川に向かう小さな谷がはしこっている。遺跡中央の平坦部分の標高は35mである。

周辺の歴史的環境について見てみる。まず先土器時代については調査例が少なく、実態がわかるものとしては青山宮脇遺跡が知られる程度である。

縄文時代の遺跡では原山向遺跡で有舌尖頭器が出土しており、草創期の遺跡として知られている。早期では東隣の神崎町西之城貝塚が井草期の貝塚として有名であり、そのほかには下総町猿山・和田遺跡、菊水城遺跡、前原遺跡、鎌部長峯遺跡がある。時期は撫糸文の段階から三戸、田戸下層あたりのものが多い。前期の資料は少なく、中期は名古屋十二代遺跡があり、斜面部分には貝層を伴う。時期は阿玉台から加曾利E IVである。後期は低段丘にある大原野貝塚があり、加曾利B 3から安行の段階のものである。晩期には先の大原野貝塚で安行から千網、荒海期の資料が出土している。また地蔵原愛宕遺跡で荒海段階の資料が見つかっている。

弥生時代の資料というのは少なく、本遺跡のほかに大和田坂ノ上遺跡、大日台遺跡、新山遺跡等が知られているだけである。このうち新山遺跡では中期の再葬墓が検出されている。

古墳時代のこの地域は房總半島でも特異なほどの量の石枕が検出されている。栗山・猫作古墳群では1埋葬施設から3個の石枕が見つかって話題になったほかに、神崎町小松古墳出土とされている石枕が東京国立博物館に6点収蔵されており、また西大須賀渡戸、高倉からも出土している。それに見合うように、大和田玉造遺跡群のような一大玉造遺跡群が存在し、滑石製模造品の製作段階に至るまで生産が続くのである。古墳について見てみると、大日山古墳が比較的古い段階のもので、全長54mの前方後円墳に木炭櫛の主体部が知られている。また下総型段階の埴輪を出す古墳も多数あり、木挽崎古墳群、坂ノ上古墳群、栗山・猫作古墳群などがそれに相当する。横穴墓群では西大須賀横穴墓群に45基が集中していたようである。集落遺跡では不光寺遺跡、大台遺跡、遠地・上敷遺跡、寺ノ下I遺跡、天神台遺跡、小野女台遺跡が比較的規模の大きなものである。

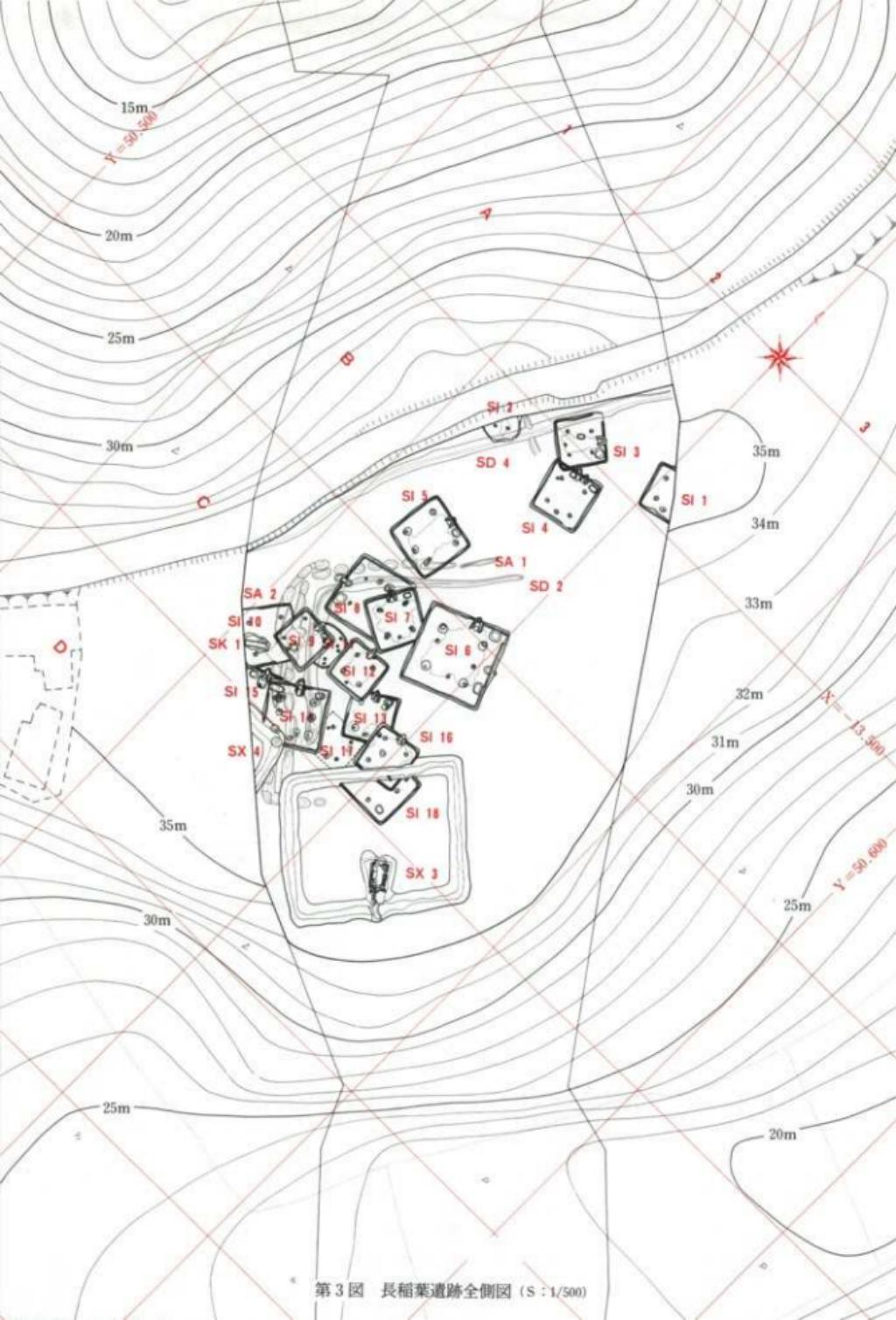
歴史時代の集落遺跡では遠地・上敷遺跡、天神台遺跡、寺ノ下遺跡、青山富ノ木遺跡、青山中峰遺跡が挙げられる。また名木庵寺、竜正院の寺院のほかに竜正院瓦窯跡も存在する。

中世では菊水城、大須賀城、小帝城、助崎城、名木城などの城館跡が知られているほかに、道作出土の古瀬戸四耳壺、乗願寺所蔵の信楽三耳壺なども存在している。



第2図 長稻葉遺跡と周辺の遺跡位置図 (S: 1/25,000)

地藏原新田



第3図 長稻葉遺跡全側図 (S : 1/500)

1章 遺構

1章 遺構

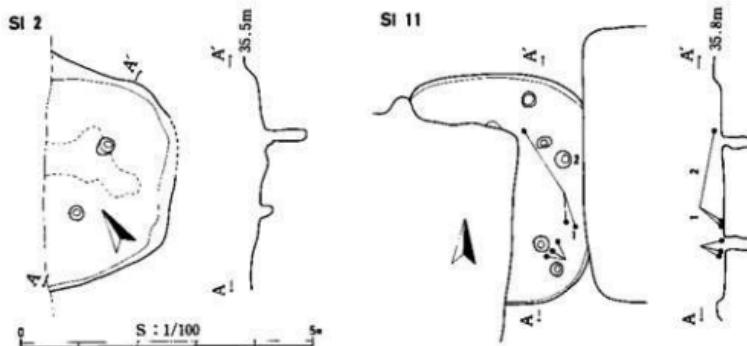
1節 弥生時代の竪穴住居

SI 2 (第4図、図版3)

調査区の北東のはずれB-2グリッドに所在する。遺構の北東側半分は調査区域外にあり、遺構のほぼ半分しか調査できなかった。遺構の平面形は、小判型の橢円形であったろうと考えられる。検出部分の規模は、短軸が3.95m、長軸は復原不能である。このため、面積も復原できない。確認面から床面までの深さは、最も深いところで40cm、平均20cmである。床面には2本の主柱穴が確認されており、本来4本の主柱穴であったろうと考えられる。柱穴の掘形は北寄りのものが径30cm、深さ70cm、南寄りのものが径27cm、深さ23cmである。床面の状況はふつうの住居と異なり、床面中央の破線によって囲まれた部分が軟質で、その外側が硬質である。

SI 11 (第4図、図版8)

調査区南東寄りのC-2グリッドに所在する。SI 9・12、SD 2と重複し、これらのすべてから破壊を受けている。平面形はSI 2よりもやや直線的な部分が多いことから、橢円形というよりも隅丸方形に近いものだったろうと考えられる。掘形規模は長軸が3.95mで、短軸と面積は復原できない。確認面から床面までの掘り込みの深さは、10から15cmである。床面には2本の主柱穴と3本の支柱と考えられる柱穴、それに北部中央に炉の残骸が確認された。2本の主柱穴は径20から25cm深さは45cm前後である。3本の支柱は北から順に径27cm、深さ30cm、次のものが径30cm、深さ25cm、最後のものが径20cm、深さ55cmである。炉はその大半をSI 9によって破壊されているために全容はわからない。



第4図 SI 2・SI 11住居実測図

2 節 古墳時代の竪穴住居

SI 1 (第5図、図版3)

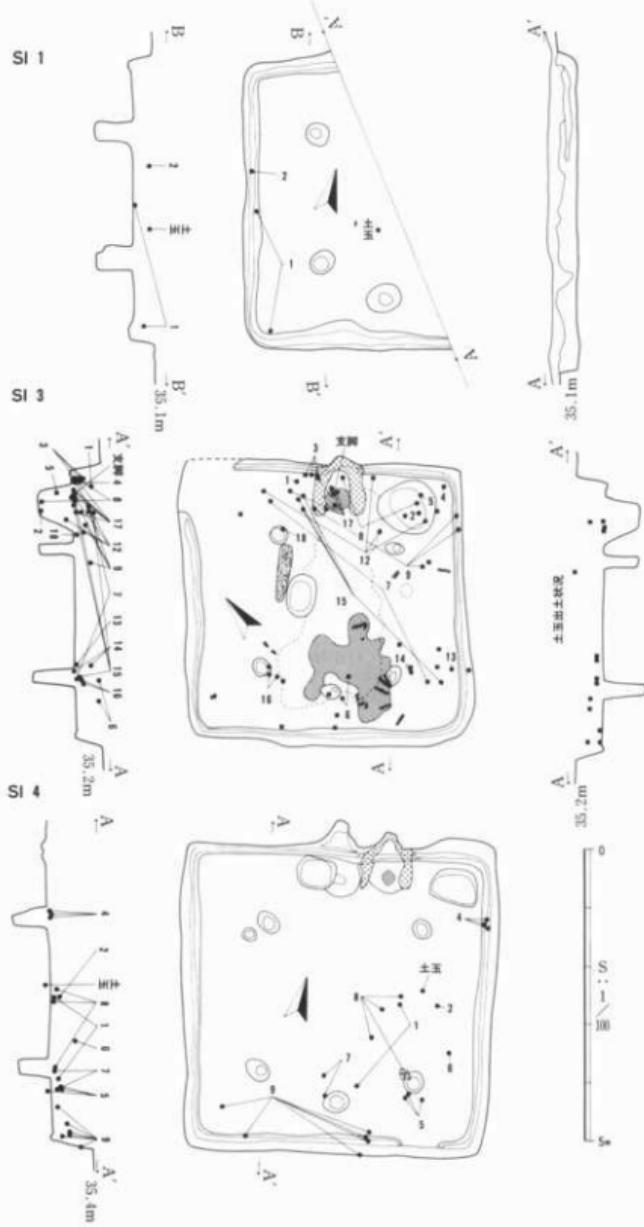
調査区北端近くのA-2、A-3グリッドにまたがって検出された。遺構の東半分は調査区域外にかかっており、調査できなかった。調査できた部分からは2本の主柱穴と、出入口ピットと考えられる柱穴が検出されている。このことから、出入口ピットの反対側である北西壁中央部分にカマドが設けられていたものと考えられる。したがって、主軸方位はN-13°-Wに復原できる。掘形規模は南北が4.92m、東西は復原で5m前後と考えられる。確認面から床面までの掘り込みの深さは35cmである。2本の主柱穴は南側のものが径35から45cm、深さ63cm、北側のものが径40cm、深さ63cmである。出入口ピットは長軸60cm、短軸47cmで、深さ30cmである。覆土の大半にはローム粒、塊が多量に混入しており、人為的堆積によるものと想定される。

SI 3 (第5図、図版4)

調査区北部のA-2、B-2グリッドにまたがって検出された。SI 4、SD 4と重複しており、北隅の壁と床面はSD 4によって破壊されている。カマドは北東壁中央に設けられており、主軸方位はN-54°-W、掘り込みの規模は4.95×4.95m、面積は23.59m²である。確認面から床面までの掘り込みの深さは50cmを測る。床面には4本の主柱穴、出入口ピット、それにカマドに向かって右側の住居西隅に貯蔵穴が検出された。4本の主柱穴はみな径が小さく、20cmから30cm、深さはそれに対してしっかりしており、60cmから80cmである。出入口ピットは長軸30cm、短軸20cmで、深さは23cmである。貯蔵穴は不整円形で、径は90cmから10cm、深さは50cmである。貯蔵穴内床面からやや浮いた状態で、多量の遺物が検出されている。床面直上南半からは広い範囲で焼土、炭化材が見つかっている。また、床面中央やや北寄りの部分には性格不明の掘り込みが検出されている。隅丸方形の掘形で、長軸70cm、短軸50cm、深さ15cmである。また、床面中央部分は出入口ピットからカマドにむかって床面が硬化している。カマドは両袖、火床面ともに明確で、比較的遺存状況の良好なものであった。また、カマド内からは遺物も若干検出されている。

SI 4 (第5・6図、図版4)

調査区北部のB-2グリッドで検出された。SI 3と一部分が重複している。カマドは北東壁に設けられているが、一度作り替えられており、古いものが壁面中央に、新しいものがやや東寄りのところに作られている。主軸方位はN-12°-Wで、掘形は5.50×5.46m、面積は29.01m²である。確認面から床面までの深さは60cm平均である。床面には4本の主柱穴と出入口ピット、支柱様の性格の断定できない柱穴が1本、それに新旧のカマドに伴う貯蔵穴が1基ずつ設けられてい



第5図 SI 1・SI 3・SI 4住居実測図

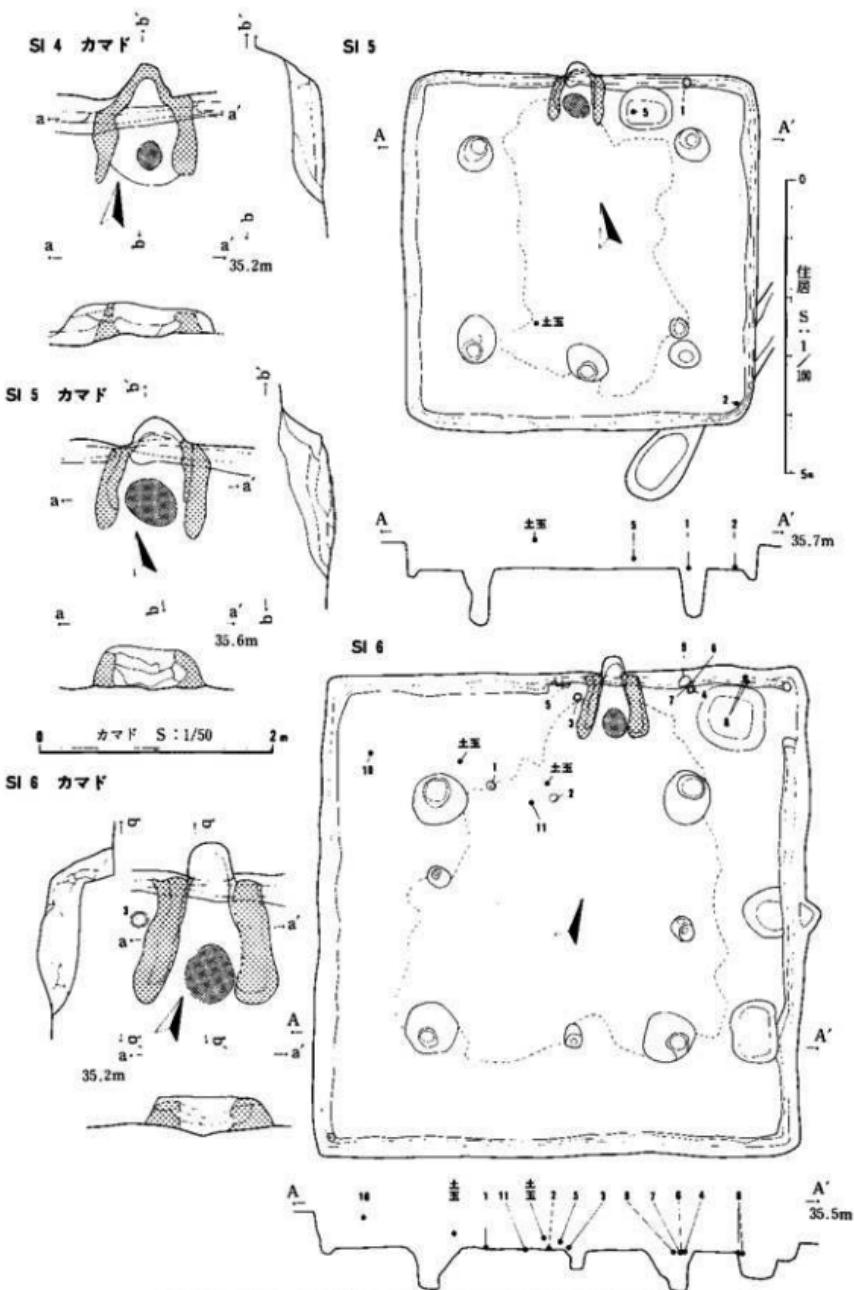
る。古いカマドに伴うものが北東隅のもの、新しいカマドに伴うものが古いカマドを破壊している北西壁中央のものである。4本の主柱穴は径が30から40cm、深さが42から65cm、第4主柱穴の西南にある柱穴は径25cm、深さ35cmである。貯蔵穴は古いカマドに伴う東側のものが長軸80cm、短軸60cmのやや形の崩れた長方形で、深さは30cm、新しいカマドに伴う中央のものが長軸65cm、短軸50cm、深さ40cmである。古いカマドはカマド尻の壁面への掘り込みと、火床面が確認された。新しいカマドは両袖がかなり瘦せた状態で検出され、火床面も検出された。

SI 5 (第6図、図版5)

調査区の中央やや北西寄りのB-2グリッドで検出された。SA 1が一部重複している。平面形は方形で、カマドは北東壁に設けられている。主軸方位はN-11°-E、規模は6.10×6.10m、面積は36.18m²である。床面には4本の主柱穴と第2主柱穴の北側に支柱様のピット、出入口ピット、それにカマド向かって右側に貯蔵穴が設けられている。4本の主柱穴は径が45から70cmとまちまちであるが、これらは建て替えか抜き取りによるものと考えられ、掘り形本体の径は30から40cm、深さは80から90cmである。第2主柱穴北側の柱穴は径35cm、深さ20cmである。出入口ピットは短軸55cm、長軸75cm、深さ40cmである。貯蔵穴は平面形長方形で、長軸90cm、短軸65cm、深さは75cmのしっかりしたものである。床面中央の主柱穴に囲まれた部分は床面が硬化している。また、床面上でわずかな炭化材が検出されたが、焼土の分布は見られなかった。カマドは火床面と両袖が明瞭に確認され、カマド尻の壁面は強く熱を受けている。

SI 6 (第6図、図版5)

調査区中央B-2、C-2・3グリッドにまたがっている。SI 7と一部重複している。カマドは新旧2基が確認されたが、そのうち良好に残っている新カマドを基準に考えると主軸方位はN-23°-Wである。規模は8.38×8.28m、面積は69.31m²である。確認面から床面までの掘り込みの深さは、60から65cmである。床面には4本の主柱穴を支柱と考えられる3本の柱穴、それに新旧のカマドにそれぞれ伴う貯蔵穴が1基ずつの合計2基の貯蔵穴が確認された。4本の主柱穴は掘り形上端で、径80から90cm、深さは65から75cmである。支柱様の柱穴は第1と第2、第2と第3、第3と第4主柱穴の間に設けられており、それぞれの径は30から40cm、深さは第1と第2主柱穴の間のものが70cmとかなり深く、他の2本は30から35cmである。2基の貯蔵穴はともに長方形で、北隅のものが85×80cm、深さ50cm、南東隅のものが80×60cm、深さ50cmである。床面の破線で囲まれた部分は床面の硬化している範囲である。カマドはまず古い方が北東壁中央に設けられており、カマド尻の掘り込みと火床面の掘り込みが検出されたのみで、完全に壊されている。新しい方のカマドは北西壁中央やや東寄りの所に設けられており、両袖、火床面とともに良好な形で検出された。



第6図 SI 5・SI 6住居、SI 4・SI 5・SI 6カマド実測図

SI 7 (第7図、図版6)

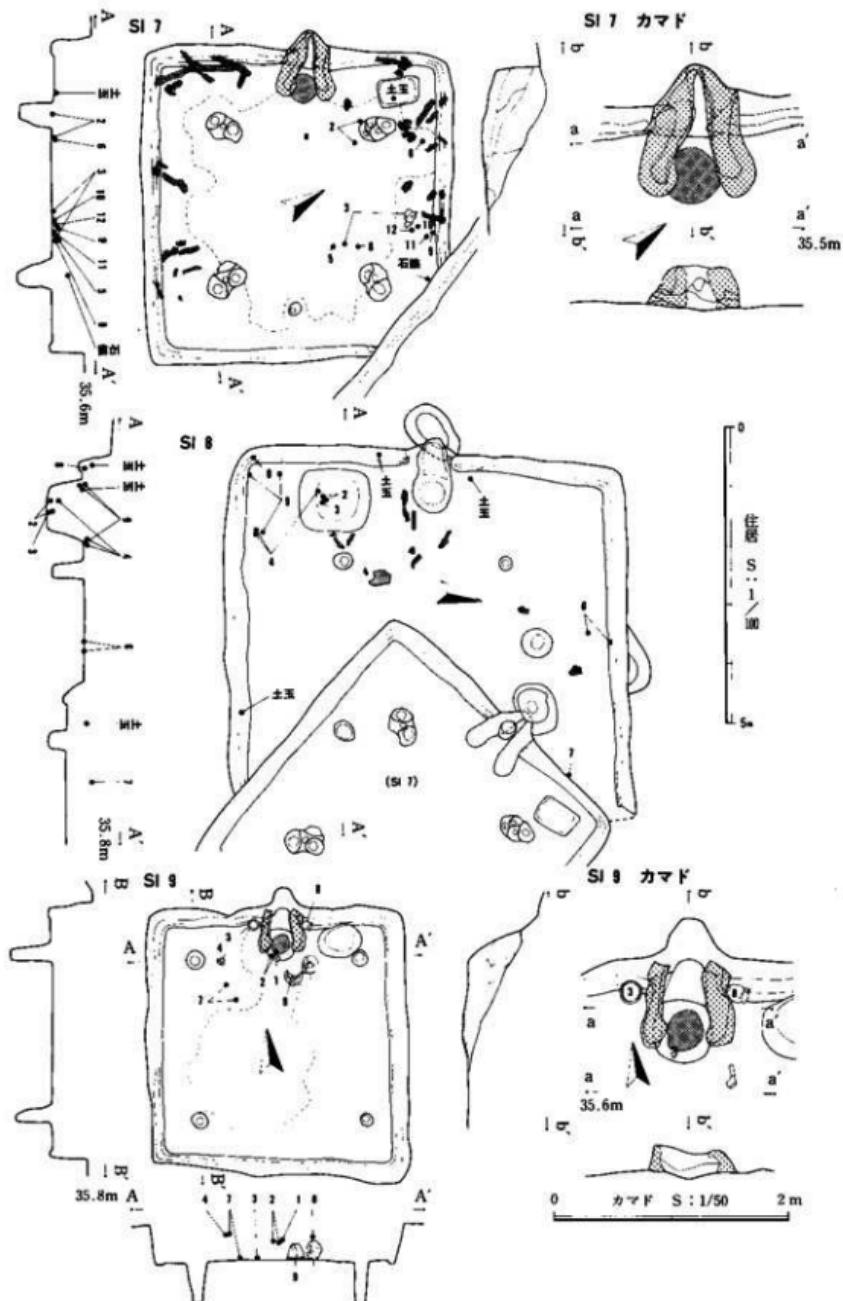
調査区中央やや西寄りのC-2グリッドに所在する。SI 6・8、SD 2と重複する。平面形は方形で、規模は 5.38×5.38 m、面積は 27.56m^2 と復原できる。確認面から床面までの深さは55から65cmである。カマドは北西壁中央に設けられており、住居主軸方位はN-62°-Wである。床面には4本の主柱穴と、1本の出入口ピット、それに向かってカマド右側の壁際に貯蔵穴が設けられている。上屋の建て替えが行われたらしく、各主柱穴は二つの掘り方を持っている。主柱穴の径は30から40cmで、深さは44から65cmである。出入口ピットはカマド対面の南東壁側に設けられており、径20cm、深さは20cmである。貯蔵穴は長方形で、長軸70cm、短軸45cm、深さ50cmである。床面はかなり広い範囲にわたって硬化した面が見られ、軟質の部分は壁際の狭い部分に限られている。カマドは比較的良好な遺存状態を示し、両袖の山砂、それに火床面も良好に検出できた。北東壁際と南西壁際では、床面からわずかに浮いた状態で炭化材と焼土が確認された。

SI 8 (第7図、図版6)

調査区中央東寄りのC-2グリッドに所在する。SI 7、SD 2、SA 1が重複している。西壁はSI 7によって破壊されているために確認できなかった。平面形は方形で、規模は南北で6.88m、東西は6.54m、面積は 45.05m^2 と復原される。カマドは西壁中央に設けられており、住居主軸方位はN-79°-Wである。床面には4本の主柱穴と新旧のカマドに対応すると考えられる2基の貯蔵穴が設けられている。主柱穴は径20から35cm、深さは45から50cmである。貯蔵穴は新しいカマドに対応すると考えられる南西隅のものが長方形で長軸120cm、短軸100cm、深さ60cmである。古いカマドは北壁中央に設けられていたと考えられ、カマド戻の壁への掘り込みと火床面が確認されている。これに伴うと思われる貯蔵穴は火床面の西にあり、平面隅丸長方形で、長軸90cm、短軸70cm、深さ35cmである。古い時期のカマドは痕跡のみとなっているが、新しい時期のカマドも遺存状況はきわめて悪く、山砂もほとんど確認できなかった。住居の覆土はレンズ状の堆積を見せているのだが、中央部分では床面直上で、壁近くでは下に一層おいて炭化材、焼土の層が確認され、新しい時期の貯蔵穴の中にも炭化材、焼土の層が見える。ただし、炭化材の総量が決して多くはないことやカマドが破壊されていることから考えて、住居廃絶後の焼却処理が行われているものと想定できる。

SI 9 (第7図、図版7・8)

調査区南西部のC-2グリッドに所在する。SI 10・11、SD 2、SA 1・2と重複する。平面形は方形で規模は 4.45×4.82 m、面積は 20.1m^2 である。カマドは北壁中央に設けられており、住居



第7図 SI 7・SI 8・SI 9住居、SI 7・SI 9カマド実測図

主軸方位はN-7°-Eである。確認面から床面までの掘り込みの深さは70から75cmである。床面には4本の主柱穴と、向かってカマド右側の貯蔵穴が設けられている。主柱穴は径20から25cm、深さは60から75cmである。貯蔵穴は平面楕円形で長径75cm、短径55cm、深さ60cmである。図中床面中央部の破線で囲まれた部分は硬化範囲である。カマドは袖の残りがやや細っており良好とはいえないが、カマド両袖の外側および南東に遺物が良好な形で検出された。

SI 10 (第8図、図版8)

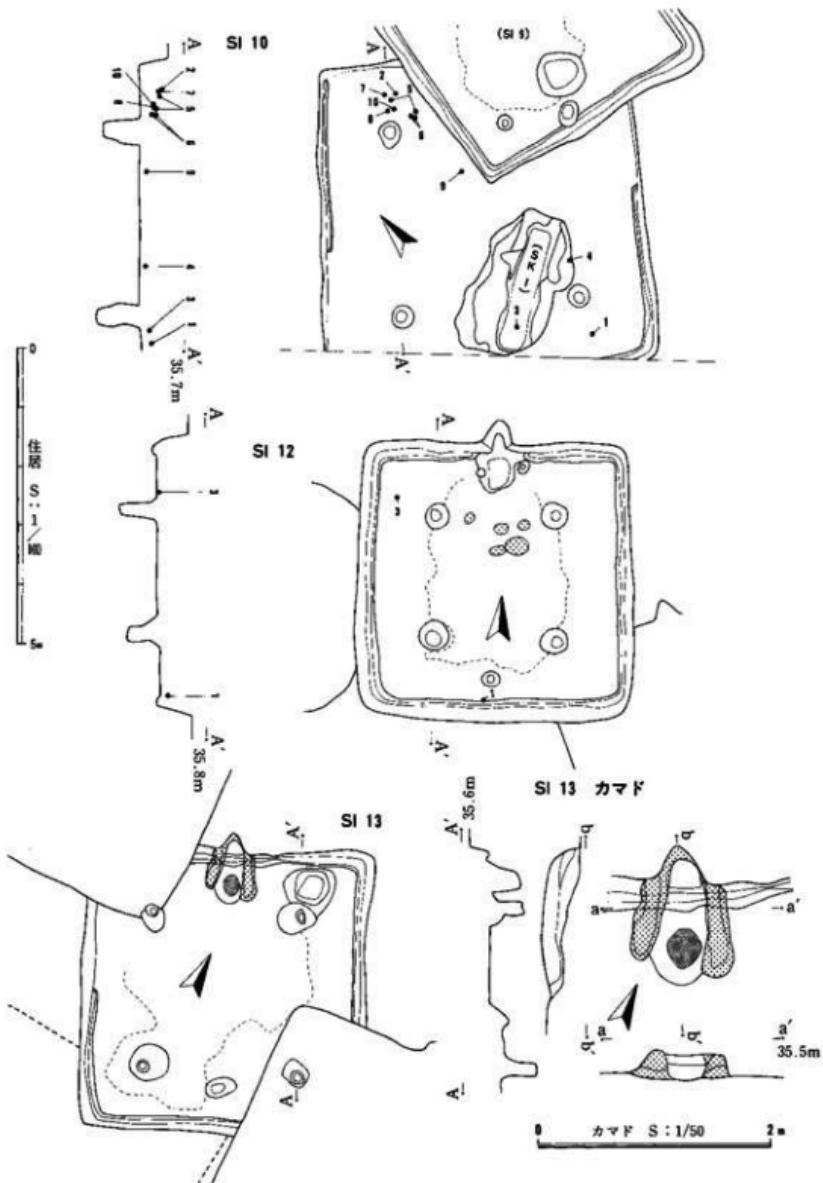
調査区南西部のC-2グリッドで検出された。SI 9、SA 1・2、SK 1と重複している。南西の一部は調査区域外にかかってしまっており調査できなかった。平面形は方形で、5.58×5.58m、面積は31.24m²と復原できる。確認面から床面までの掘り込みの深さは50cmである。貯蔵穴の位置などの状況から見てカマドはSI 9に破壊されたらしく、これから考えると住居主軸方位はN-38°-Wということになる。床面には4本の主柱穴と、東隅の貯蔵穴が確認された。主柱穴は径40cm前後、深さは62から74cmである。貯蔵穴は長方形で長軸80cm、短軸70cm、深さ40cmである。

SI 12 (第8図、図版8)

調査区南西寄りのC-2グリッドに所在する。SI 11・13と重複している。平面形は方形で規模は4.78×4.78m、面積は22.24m²、確認面から床面までの掘り込みの深さは55cmである。カマドは北壁中央に設けられており、住居主軸方位はN-3°-Wである。床面には4本の主柱穴と1本の出入口ピットが確認された。主柱穴は径40から50cm、深さ54から68cmである。出入口ピットは長径30cm、短径20cm、深さ27cmである。カマドは遺存状況不良で、山砂もほとんど残っていなかった。また、カマドの袖と思われる部分の両脇の床面からは、浅い掘り込みが検出されている。図中破線で囲まれた部分は床面の硬化しているところである。またカマドの前面の床面には山砂と粘土の混ざった塊が広がっていた。

SI 13 (第8図、図版9)

調査区中央南寄りのC-2グリッドで検出された。SI 12・16と重複している。平面形は方形で、規模は4.9×4.9m、面積は23.91m²、確認面から床面までの掘り込みの深さは30cmである。カマドは北西壁中央に設けられており、住居主軸方位はN-28°-Wである。床面には4本の主柱穴と出入口ピット、それに向かってカマド右側に貯蔵穴が設けられている。主柱穴は抜き取りによるものかと思われるが、すべて上端が大きく広がっている。中場付近のおそらくもとの形に近いであろう付近の径を計測すると20cm程度、深さは63から80cmである。出入口ピットはカマド対面の壁側にあって、長径50cm、短径35cm、深さ35cmである。貯蔵穴はやはり上端が大きく広がっており、中場で計測すると60×60cmの方形で、深さは60cmである。図中破線で囲まれた部



第8図 SI 10・SI 12・SI 13住居、SI 13カマド実測図

分は床面が硬化している。カマドは比較的良好に遺存しており、両袖、火床面ともに良好に確認できた。

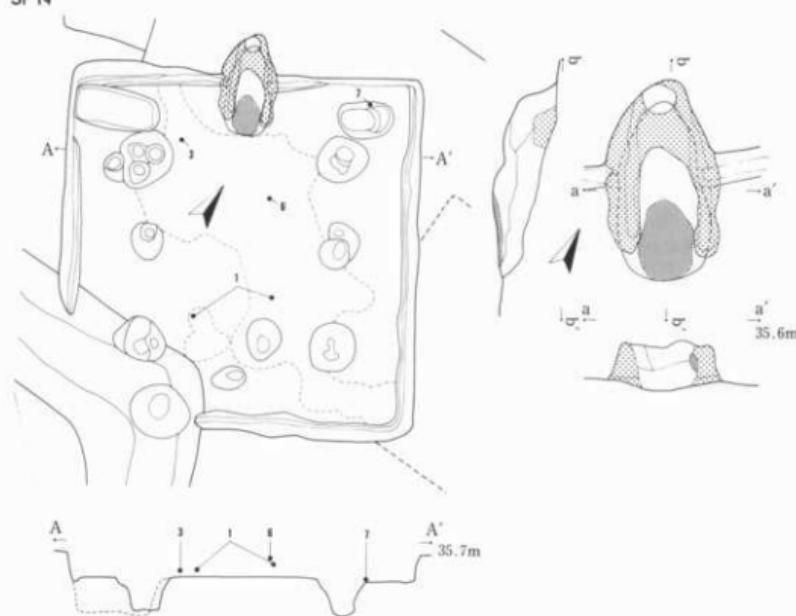
SI 14 (第9図、図版9)

調査区南西部のC-2グリッドに所在する。SI 15・17、SX 4、SD 2、SA 1・2と重複している。平面形は方形で、規模は $6.12 \times 6.20\text{m}$ 、面積は 37.68m^2 に復原される。主軸方位はN-33°-Eである。床面には4本の主柱穴のほかに、第1と第2の間、第2と第3の間、第3と第4の間に各1本ずつの3本の支柱と考えられる柱穴、カマド対面の南東壁際に出入口ピット、それにカマドの両側に1基ずつの2基の貯蔵穴が設けられている。第4主柱穴に掘り方が4本確認できることから、上屋は建て替えられている可能性が高い。貯蔵穴は2基が同時に機能していたのではなく、それぞれの土層断面から見て、最初西側のものが使われていて、後に東側のものが作られ、西側のものはその際に埋められてしまっているようである。主柱穴は上端の径がありにもまちまちであるので、第4主柱穴に見える中場の径が比較的均一なようなので、その計測値を示すと30cm前後、深さは54から65cmである。3本の支柱は第3・第4主柱穴間のものの中場を見ると径30cm、深さは38から45cmである。出入口ピットは長径60cm、短径35cmの平面椭円形で、深さは40cmである。貯蔵穴は西側の古いものが平面長方形で、長軸150cm、短軸70cm、深さ55cm、東側の新しい物がやはり平面長方形で下端は2段になっている。長軸100cm、短軸65cm、深さ50cmである。カマドは細長く、カマド尻も比較的長く壁外に出ている。遺存状況は良好で、天井部の一部も確認できた。

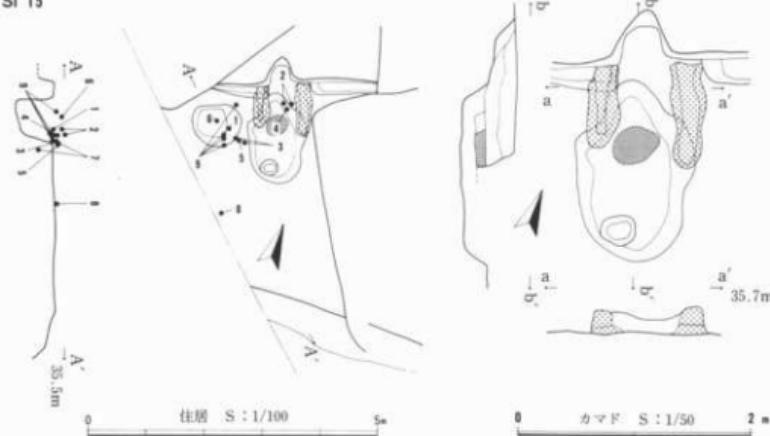
SI 15 (第9図、図版9・10)

調査区南西のC-2グリッドに所在する。SI 10・13、SX 4と重複する。南西側は1/3ほどが調査区域外にかかっており調査できなかった。平面形は方形であろうと思われるが、北西壁が確認できたのみで他の部分は分からず、遺構の規模はまったく不明である。カマドは北西壁に設けられており、これと西壁から判断して住居主軸方位はN-11°-Wとなる。確認面から床面までの掘り込みの深さは20cmである。床面にはカマドに向かって左側に長方形の貯蔵穴が設けられている。SI 14の床面第4主柱穴の西側に接してこの住居に伴う主柱穴と考えられる柱穴があるが、ほかの対応するはずの主柱穴が確認されず、断定できない。また、カマドの前面からカマド下に広がる性格不明の土壤様の掘り込みがあり、これにかかる形で柱穴らしいものも見られるが、やはり性格は断定できない。貯蔵穴は長軸80cm、短軸70cm、深さ60cmである。カマドの遺存状況は比較的良好で、両袖、火床部が確認できたほかに、カマド内からは2の土器が検出されている。

SI 14



SI 15



第9図 SI 14・SI 15住居、SI 14・SI 15カマド実測図

SI 16 (第10図、図版10)

調査区南寄りのC-2・3グリッドで検出された。SI 13・18、SX 3と重複している。平面形は方形で、規模は4.85×4.80m、面積は23.28m²、確認面からの掘り込みの深さは50cmである。カマドは北壁中央に設けられており、住居主軸方位はN-5°-Wである。床面には4本の主柱穴が確認されており、そのうち第2主柱穴のみ2本の掘り込みが並んで検出された。径は35から40cm、深さは65から74cmである。貯蔵穴は住居北東隅の壁際で検出された。梢円形で長径62cm、短径55cm、深さは35cmである。図中の破線で囲まれた部分は床面の硬化範囲である。カマドは火床部のほかに両袖がかなり痩せた状態で検出された。住居北半には炭化材の分布が見られ、貯蔵穴の覆土上層にも入り込んでいる。

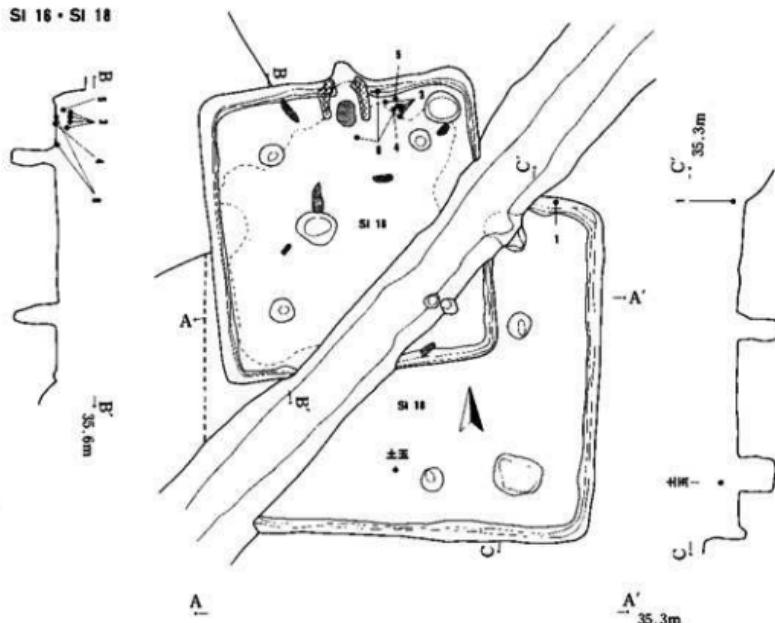
SI 17 (第10図、図版10)

調査区南寄りのC-2グリッドで検出された。SI 13・14、SX 3、SD 2と重複している。壁の起ち上がりは全く検出されず、主柱穴や出入口ピットの検出に寄って竪穴住居であることが確認できた遺構である。柱穴の並びや出入口ピットの位置から考えてカマドは北壁にあったものと想定され、住居主軸方位はN-3°-Eが復原できる。主柱穴は4本で径は30cm前後、深さは50から64cmである。第4主柱穴の南西側には径20cm、深さ50cmの柱穴があるが副柱かと考えられる。出入口ピットは径50cm、深さ25cmである。第3主柱穴の北側には硬化した床面がわずかに確認できた。また、第1主柱穴と第2主柱穴の間には床面の被熱部分が確認されたのだが、これがカマドの火床部かどうかは、カマド材の散布が周辺に見えなかったために断定できない。

SI 18 (第10図、図版10)

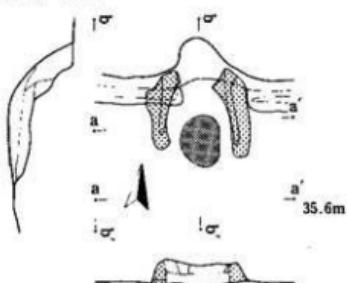
調査区南寄りのC-2・3グリッドにまたがって検出された。SI 16、SX 3と重複している。住居北西の2/3が重複する両遺構によって破壊されている。平面形は方形で、規模は南北が5.88m、東西は不明であるが、正方形を想定すれば面積は33.89m²が求められる。確認面からの掘り込みの深さは40cmである。この住居に伴うと考えられる柱穴様の掘り込みは全部で5基確認できたが、住居の各隅に設けられている掘り込みは貯蔵穴のようにも見られ、性格の断定は難しい。ほかの2本は柱穴もしくは出入口ピットのいづれかになろう。

SI 16・SI 18

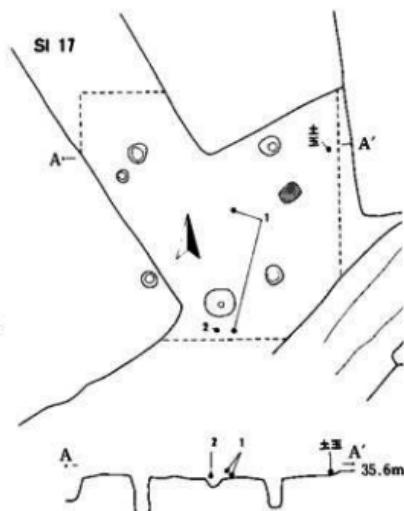


0 住居 S : 1/100 5m

SI 16 カマド



カマド S : 1/50



第10図 SI 16・SI 17・SI 18住居、SI 16カマド実測図

3 節 古墳

SX 3 (第11・12図、図版12~15)

墳丘・周溝

調査区南隅のC-2・3、D-2・3グリッドにまたがって検出された。調査前から墳丘の遺存が確認された古墳で、從来から把握されているところの長稻葉古墳群のなかの一基である。

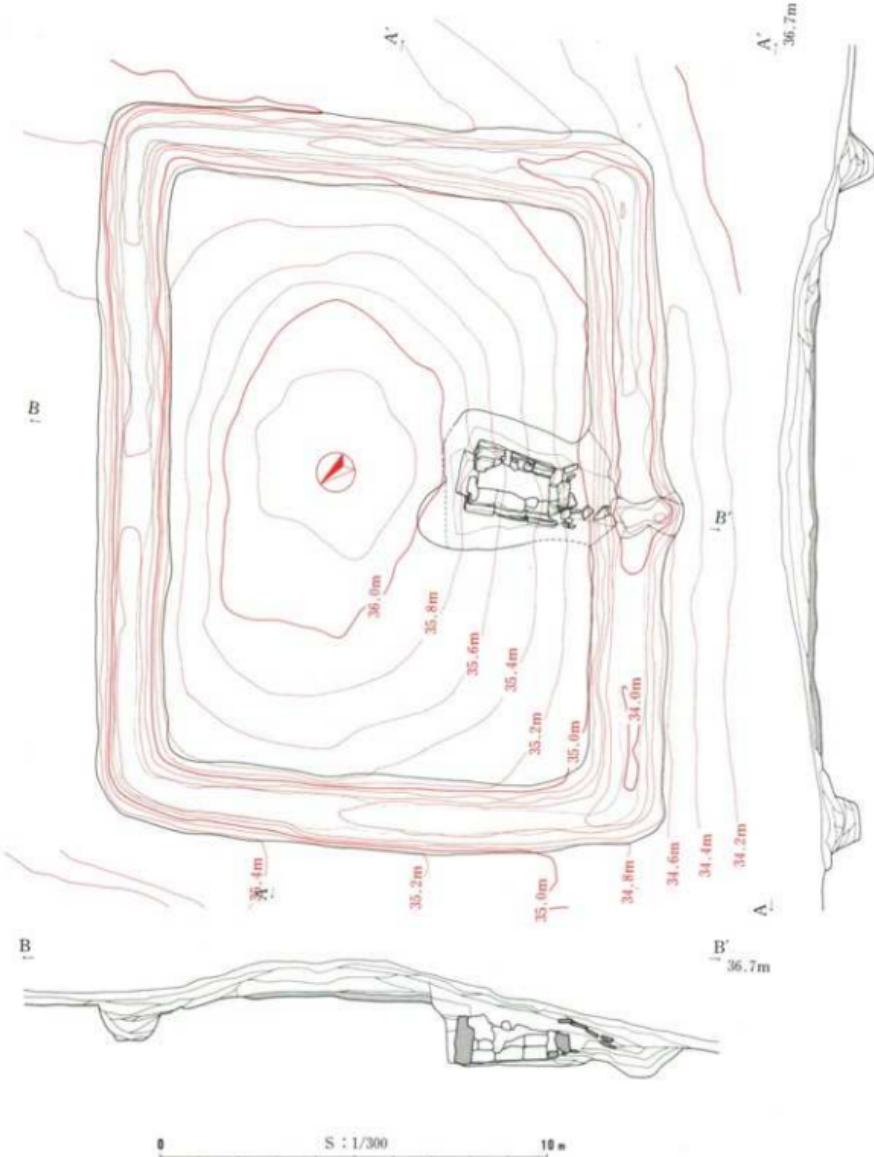
平面形はややひしやげた長方形で、周溝内側で長軸14.9から15.0m、短軸10.8から11.0m。周溝は断面形逆台形で、上端幅は最も狭いところで1.6m、最も広いところで2.1m、深さは平均0.9mである。埋葬施設前面の周溝はやや外側に突き出したような形状になっており、石室前庭の延長部は一段深くなっている。墳丘土層断面図によると旧表土層から現存の封土最上面までの厚さは0.6から0.7mで、周溝内側の起ち上がり面から墳丘最上部までの高さは1.5mである。封土の層序は比較的単純で、旧表土上面に大きく2層、下にローム粒・塊を多量に含む黒褐色土、その上にややさらさらした同様の混入物を持つ黒褐色土がのっている。

埋葬施設

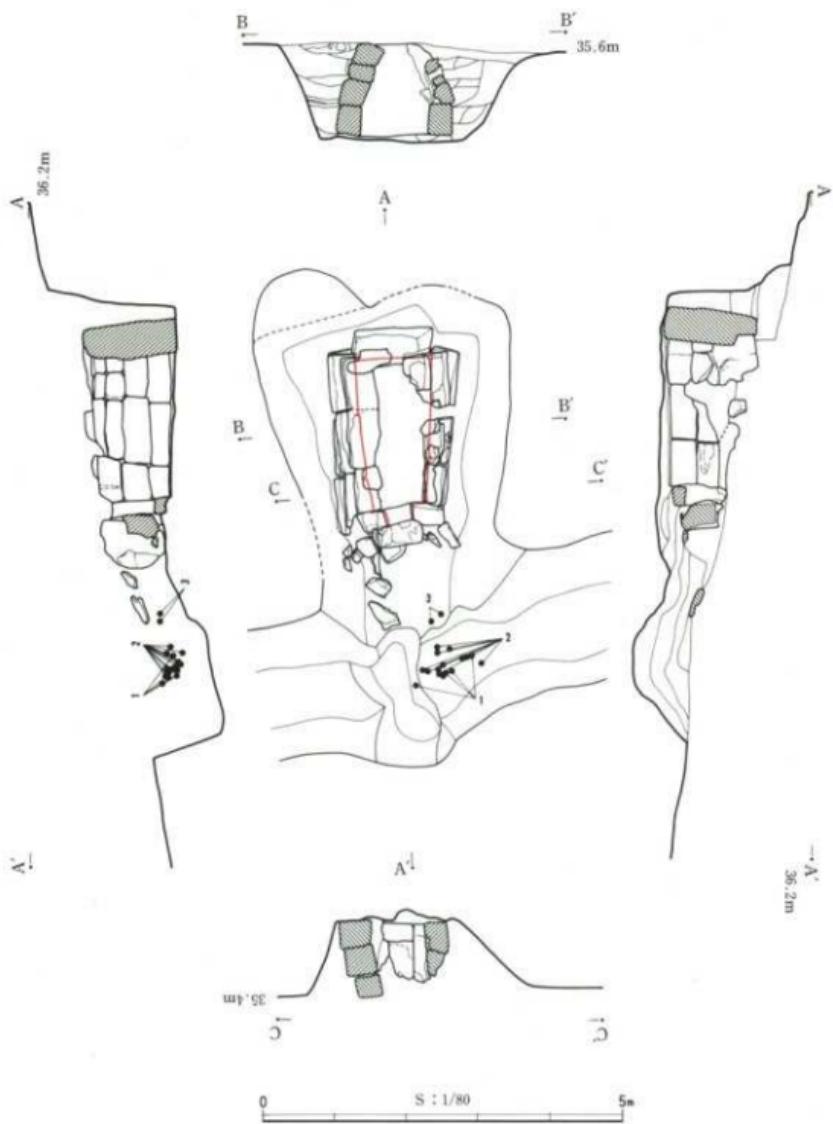
埋葬施設は単室構造の半地下式横穴式石室である。石室は旧表土上面から1.5mほど掘り下げて掘り形を設け、そこに構築している。墳丘封土の構築よりも石室の構築の方が先であることは、旧表土上面に石室の石材の屑が散っていることによって確認できた。掘り形の平面形は幅広の羽子板形で、規模は奥壁側上端幅3.5m、下端幅2.7m、玄門側上端幅2.5m、下端幅1.2m、長さは周溝上端の線を結んだ所から奥壁側上端までが3.8m、周溝下端から奥壁側下端までが4.2mである。

石室は掘り形底面に厚さ5から10cmほどの石屑を微量に含む整地層を設けた後に構築されている。石室床面には石敷きなどの形跡はみられなかった。石室構築材は天井材が網雲母片岩、それ以外の部材は軟質砂岩の切り石を用いている。ただし盜掘を受けており、墳丘土層断面図を見てもわかるとおり天井材ははずされた状態で確認されており、閉塞石・側壁材の上方が破壊され、前庭部分の石材もかなり崩れている。

石室床面の規模は、実測図が調査時に作成されていないために正確なことはわからない。エレベーション図などから復原すると、玄室長2.0から2.1m、玄室幅は奥壁で1.07m、玄門内側で0.75mというものになる。玄門幅は0.35m、框石幅0.22mである。奥壁は一枚石で、側壁の持ち送りに合わせて上方に向かってすばまる台形で、高さ1.22m、基底幅1.14m、上端幅0.76m、石材の厚さは0.45mで上方に行くにしたがってわずかに薄くなる。側壁の持ち送りに合わせて割り込みが設けられている。側壁は左右ともに横長の長方形の切り石を3列4段に積み上げている。奥壁前の左右の側壁上方の石材はクリープによって小さくなつたものかどうか分からぬ。



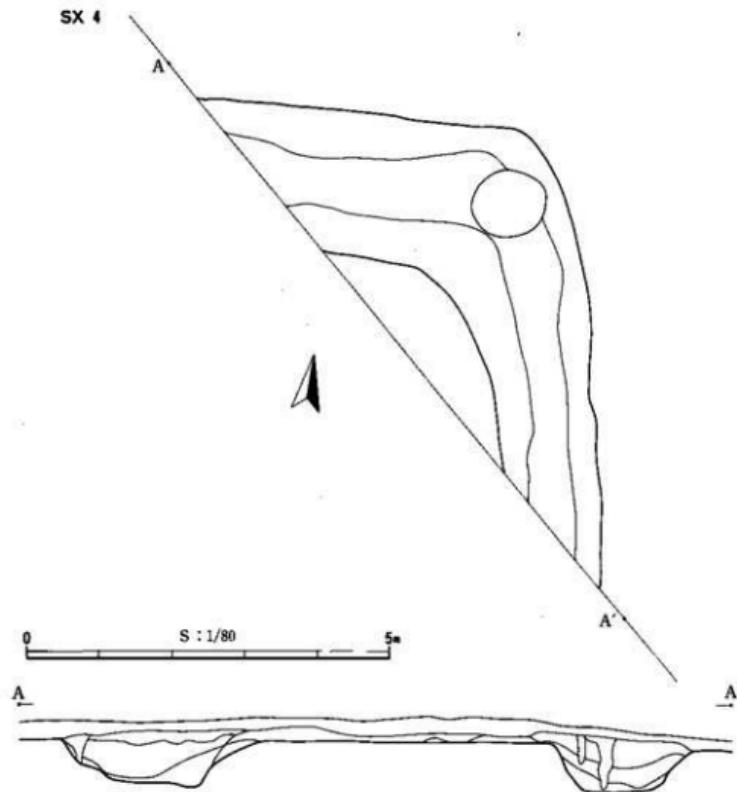
第11図 SX 3墳丘平面実測図、土層断面実測図



第12図 SX 3横穴式石室実測図

SX 4 (第13図、図版16)

調査区南寄りのD-2グリッドで検出された。墳丘は調査前から確認されていたが、遺構の大半は調査区域外にかかっている。SX 3同様に方墳であるとすれば、周溝もごく一部分が検出されているに過ぎない。検出部分の周溝は断面逆台形で、上端幅が最も狭い所で1.3m、最も広い所で2.0m、確認面からの深さは0.5から0.65mである。



第13図 SX 4実測図

4 節 塚およびそれに伴う埋葬土壙

SX 1・2 (第14図、図版11)

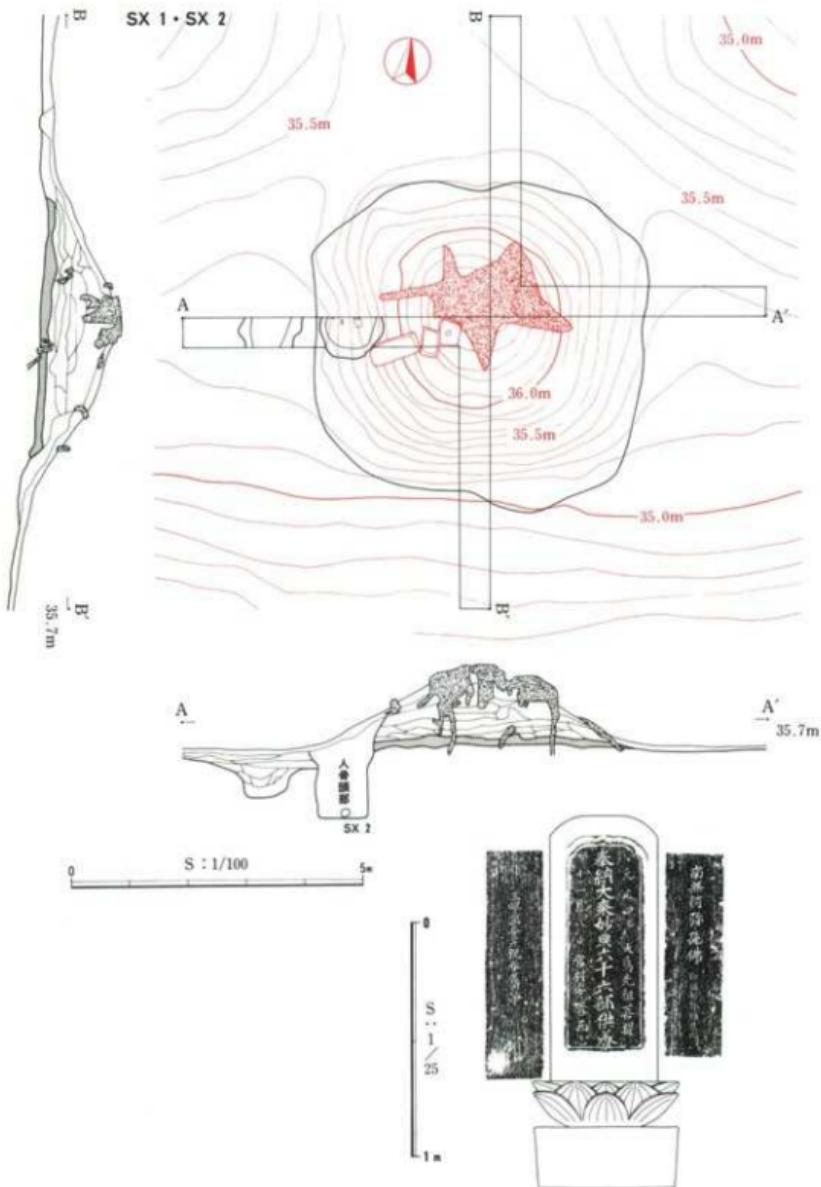
SX 1とした塚は遺構の大半が調査区域外にかかっているが、一部分が調査区内にかかっているために十文字のトレンチを設けて調査した。このトレンチ調査によって検出されたのがSX 2の埋葬土壙である。SX 1の土層断面図をみて分かるように、SX 2はSX 1構築後に掘り込まれたものである。塚の中央には大きな樟の木が生えており、その南西の根方には一基の石碑が建てられていた。調査の段階ではすでに倒壊していた。石碑は三層で、方形の基段の上に蓮華座、そしてその上に以下のような銘文の刻まれている碑である。前面と両側面に碑文が見える。

元文四己未天為先祖菩提 奉納大乘妙典六十六部供養 十一月八日當村安普西心	正 面
南無阿彌陀佛 即法妙詠禪定尼	右
三界萬靈六觀音等	左

と刻まれている。銘文から見て六十六部聖の手による經塚と考えられる。碑文中の元文4年は西暦1739年である。六十六部塚は碑文中にもるように「大乘妙典」つまり「法華經」を納経する塚であり、經筒などの埋納を伴う場合もあるが、寺社等に奉納する場合もある。今回の調査の場合は、トレンチ調査であったために納経の有無は確認できなかった。

塚の平面形は方形であるが、トレンチでは周溝状のものは見いだすことができなかつた。見かけの規模は5.5×5.5mで、高さは旧表土と考えられる土層の上面から1.1mである。

SX 2は上端で1.1m、下端で0.8mの平面円形、深さは塚の盛土中位からで1.75m、基部からで1.1mである。底面で人骨頭部ほかが検出された。



第14図 SX 1・SX 2実測図、石碑実測図

5 節 道路状遺構

SA 1・2、SD 2 (第15図、図版16)

SA 1・2、SD 2というように柵列および溝跡として調査したものは、第15図を見てわかるように調査以前に道路として認識されていたものと一致する。したがって、これらが単独で検出された場合は柵列、溝として認識されてしまう可能性が非常に高いのであるが、本遺跡においては幸いにも道路に伴う遺構であることが確認できたわけである。この場合、正確には道路そのものの遺構というよりは側溝などの道路に伴う遺構というのが的を射ていよう。調査以前に道路として認識できたものは、このほかにSX 3の墳丘を南西から北東に向かうような格好のものが1本あった。ただし、こちらの道路については調査の段階ではそれに伴う掘り込みは確認できなかった。この2本の道路はSX 1・SX 3・SX 4に挟まれた部分でつながっている。

SA 2とSD 2は道路の両脇を取り囲むように、SA 1は直角に曲がる地点の北側においては道路の端にかかっているが、南側においては道路の中央にかかっているように掘り込まれている。SD 2から説明すると、上端幅は0.4mから2.0m、深さは10cmから30cmである。SA 1は細長い溝状の掘り込みを見せる部分と柵列状の掘り込みを見せる部分とに分かれれる。溝状の形状の部分は上端幅0.4から0.7m、深さは15cm前後である。柵列状の部分は上端幅0.6から1.0m、深さは0.13から0.3mである。SA 2はやはり溝状の部分と柵列状の部分とに分かれれる。溝状の部分は上端幅0.5から1.0m、深さ0.07から0.2mで、柵列状の部分は上端幅0.8から1.0m、深さは0.25から0.34mである。

6 節 溝状遺構

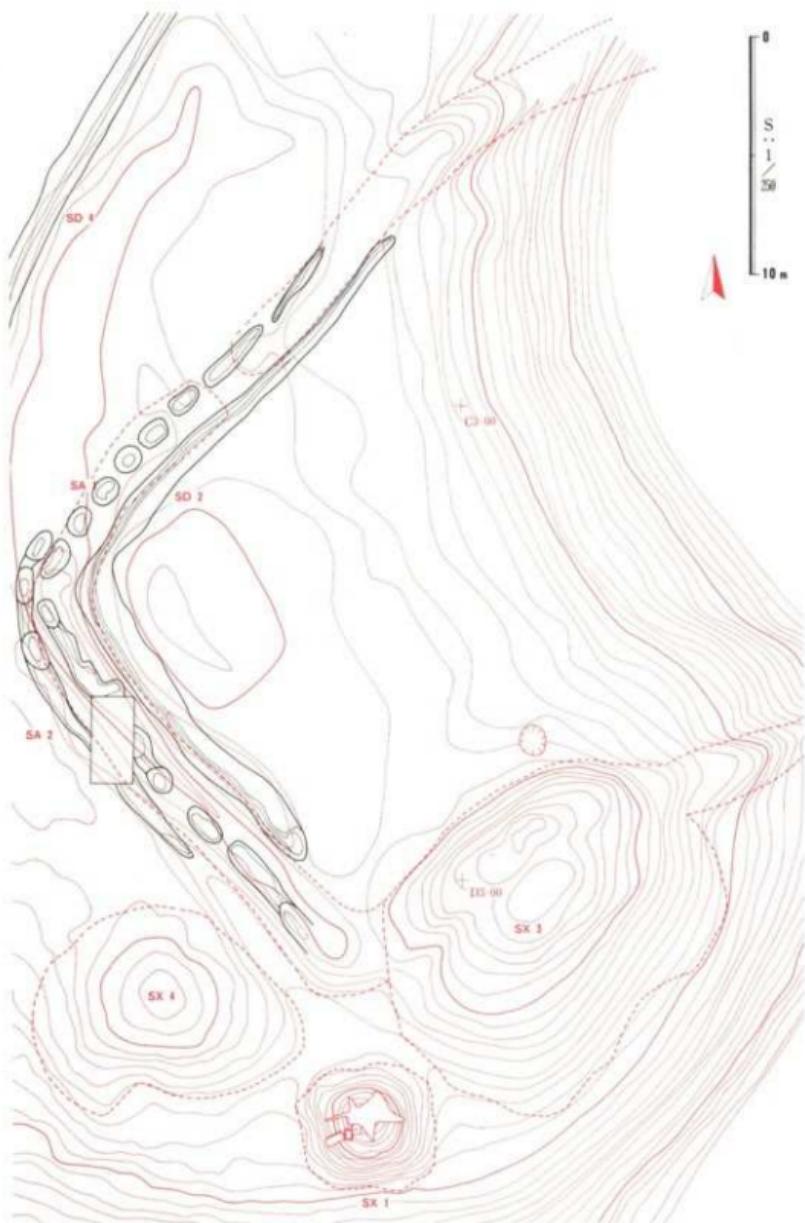
SD 4 (第16図、図版16)

調査区の北西部際を境界線に沿ってはしつてある。この調査区境界北西には農道がはしつてあり、道路の側溝の役割を果たしていたかもしくは根切り溝の役割を果たしていたかのいずれかであろうと考えられる。調査部分の全長は44m、上端幅は1m平均、深さは30から40cmである。断面系はやや底の狭い逆台形である。

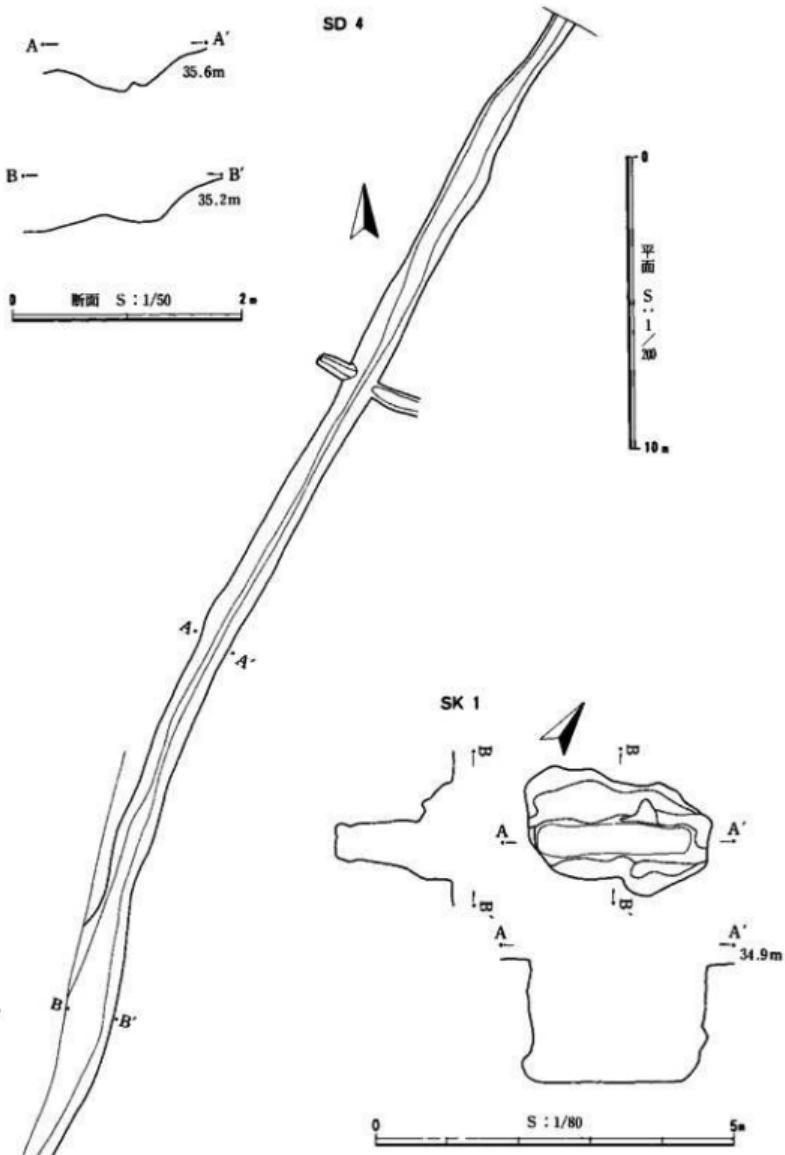
7 節 陥し穴状遺構

SK 1 (第16図)

調査区南西端のC-2グリッドに所在する。SI 10床面で検出された。地形傾斜方向に長軸をもち、主軸方位はN-60°-E。平面形は長方形で、上端は長軸2.5m、短軸は1.3m、下端は長軸2.1m、短軸0.4mである。掘り込みの深さはSI 10床面の検出面から1.6mを測る。



第15図 SA 1・SA 2・SD 2実測図



第16図 SD 4・SK 1実測図

2章 遺物

2章 遺 物

1節 繩文土器・縄文時代の石器等

縄文土器（第17～21図、図版17～19）

本遺跡からは、総数254点の縄文土器が出土している。その内訳は早期沈線文175点、前期末1点、加曾利E式1点、加曾利B式72点、安行1式5点で、調査区の北半で多く出土したが、南半でも遺構覆土中から少量出土している。

第I群土器：三戸式・田戸下層式比定の土器群（1～137、148～152）

本群は遺跡内で主体を占める沈線文土器群で、出土土器総数の70%を占める。いずれも小破片で、口縁部資料は図示したものに限られ、全体の形を窺える資料は出土していない。B2区で10m前後の範囲で遺物の集中箇所が検出されているが、両型式とも混在した出土状況を示している（第18図）。

1類（1～11）。刺突を有する太沈線施文の土器。1・2は口縁がやや外反し、口端部が外削ぎで、沈線間に半截竹管による爪形文が施される。3は1と同一個体で、体部に太沈線による斜位沈線が施され、内外面ともミガキが加えられる。4・5は爪形の向きが逆となり、5の口端部は内削ぎである。6は爪形文下に矢羽状の短沈線（細沈線）が巡らされ、内外面ともミガキが加えられる。7は口端部が外削ぎで、口縁部沈線・斜位沈線に沿って刺突が加えられる。8は斜位沈線と縦位のベン状刺突が施され、内面に擦痕が見られる。9は縦位の短沈線と横位沈線が組み合わせられている。10は縦位の沈線内に刻目が加えられる。11は幾何学状区画内に刺突が充填される。本類は田戸下層式に比定されよう。

2類（12～98・104～111）。太沈線施文の土器。12～28は口縁部資料である。12～15の口端部は外削ぎで、横位の太沈線が施され、12には斜位の沈線が見られる。12・13は外反気味に口縁が立ち上がる。16～18は口縁がやや外反し、口端部に斜位の刻目が加えられる。16・17は同一個体で、2条の横位沈線下に斜位の沈線が、18は横位沈線下に縦位の沈線が施される。19～22は口端部が外削ぎで、横位の多条沈線が施される。19は明瞭な太沈線、21は口縁直下の細沈線と太沈線で構成され、22は断続的な沈線となっている。19を除き口縁はいずれも外反気味に立ち上がる。23は器面の摩耗が著しいが、横位の沈線下に縦位の沈線が認められる。24～26は細目の沈線が横位に施される。24は斜位の刻目、25・26は口端部が内削ぎで、口縁部直下に刺突が巡らされる。27は平坦な口端で、縦位の沈線が施される。28は口端が内削ぎで、斜位の沈線が施される。その他は体部資料で、短沈線（29～32）、横位沈線（33～60）、斜行沈線（61～98）、縦位沈線（104～111）で構成されるものに大別される。本類の多くは三戸式の太沈線文に比定されるが、一部田戸下層式（61～63他）も含まれる。

3類 (99~103・114・115・117・118)。細沈線施文の土器。斜位の細沈線文 (99~101)、縱位の細沈線文 (102・103)、格子目状沈線 (115・117・118)、平行する沈線間に短沈線を充填するもの (114) が見られ、三戸式に比定される。

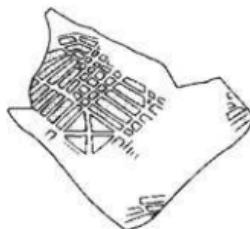
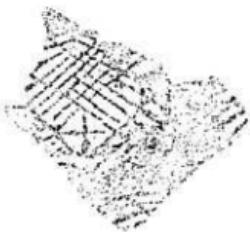
4類 (112・113・120~126)。その他を一括する。112は斜位の短沈線が多段に構成される。113は細沈線とともに貝殻復縁圧痕が施される。120~126は無文の土器で、121~123は横位の擦痕が顕著で、弱い横位の凹線が認められる。

5類 (127~137)。押型文土器。2個体出土しており、山形状 (127~129) と格子目状 (130~137) とに大別される。いずれも遺構覆土からの出土で、沈線文との明確な共伴関係は得られない。127~129は縱位方向回転で、山形の角度が不統一で、断続した部分も認められる。130~137は「十」字を中心とする格子目で構成されるが、斜線が中途で止まり、長短それぞれの矩形が認められる。資料が限定されていることから施文原体の復原は困難であるが、拓本を重ね合わせると、第17図に示すようになる。これをもとに軸の直径を推定すると最低でも1.4cmを測り、かなり太い軸が用いられたことになる。編年的位置は三戸式併行と思われ、東北地方との関連が想定される。

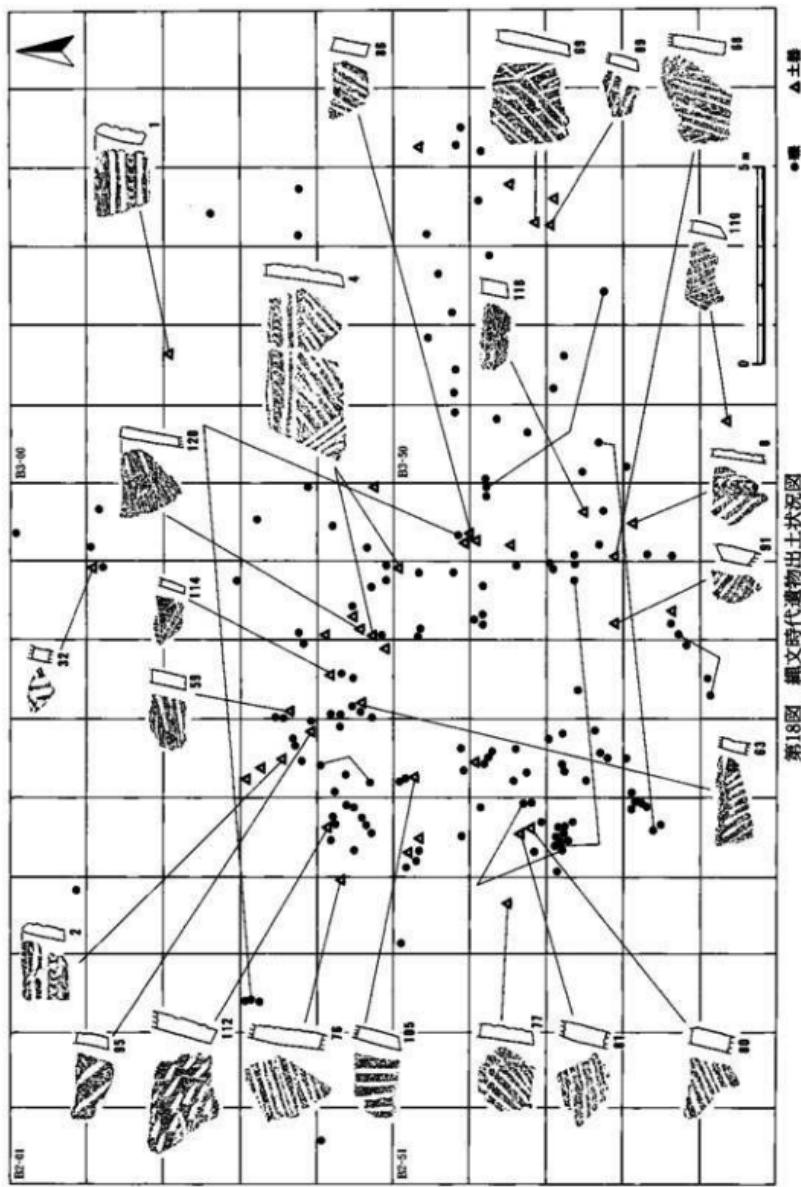
底部 (148~152)。いずれも尖底で、149は横位の太沈線文が施され、150・151は縱位の削り痕が顕著に認められる。

第二群土器：後期後葉の土器群 (138~147)

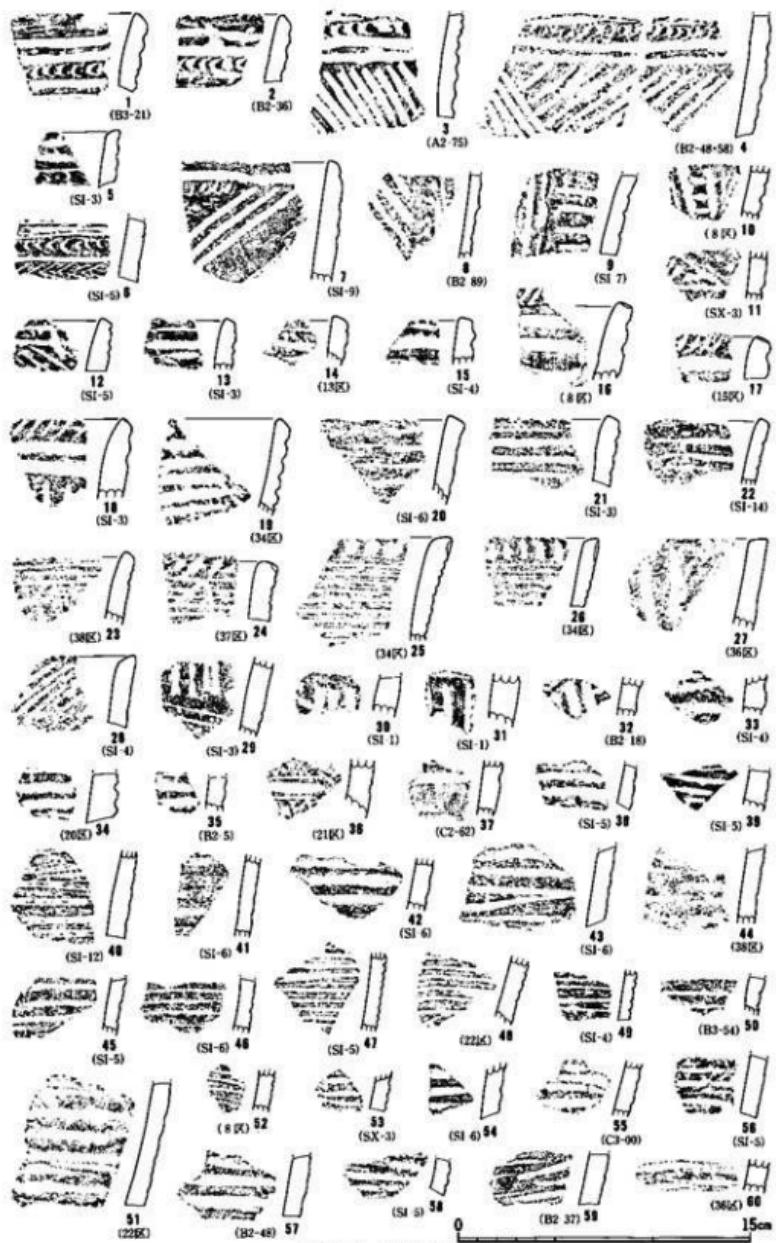
本群は加曾利B 3式、安行1式に比定される。すべて表面採集の小片資料で、発掘調査では検出されていない。141~143は加曾利B 3式の大波状口縁深鉢で、141は口縁端部に1条の刻目帯、142は屈曲部直下に刻目帯が巡らされる。141のII a文様帶は繩文帶で構成されると想定される。144・145は体中位で屈曲する紐線の粗製深鉢で、144は繩文地に横位の条線、145は斜位の密な条線が加えられ、前者は加曾利B 3式、後者は骨谷式~安行1式に比定される。138~140は同一個体の鉢形で、安行1式に比定される。口縁端部が肥厚し、内側に傾斜し、帶繩文が2段回繞される。146・147は同一個体で、口縁が内傾する安行1式の抱弾形深鉢で、瘤状突起は丸い形状を呈する。



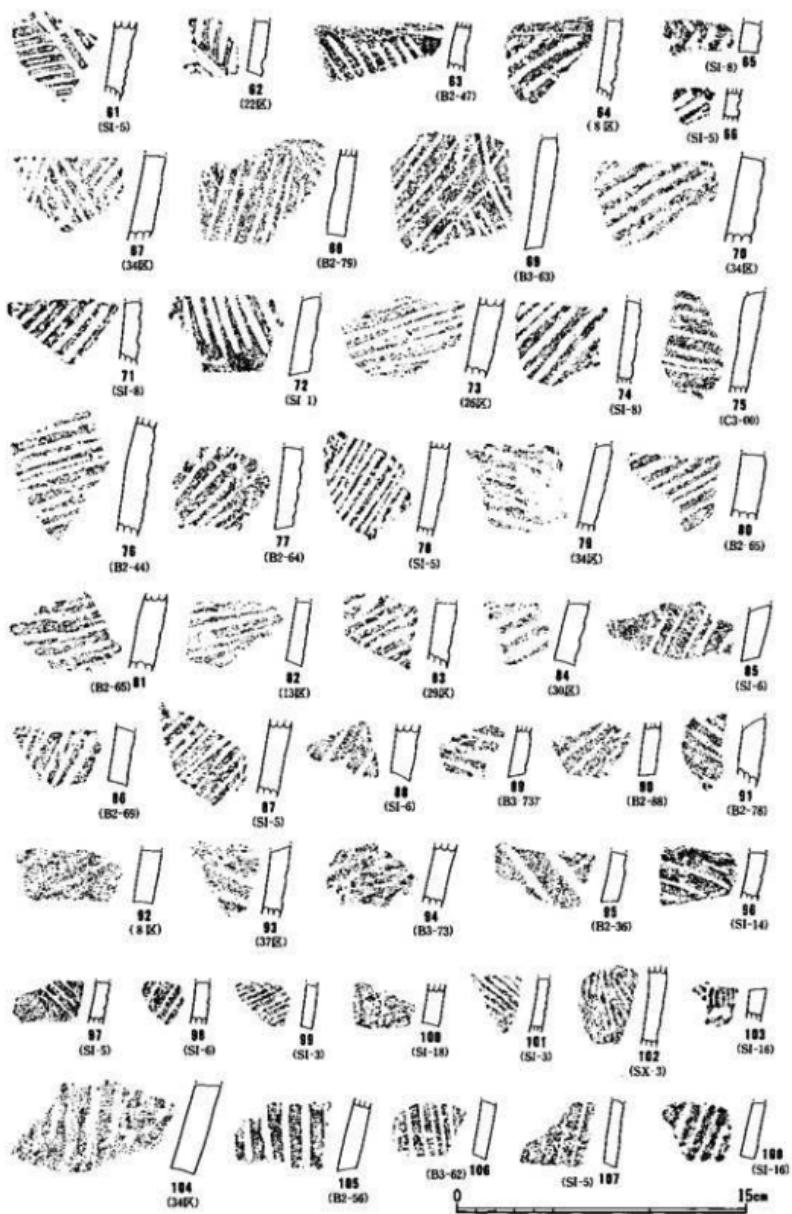
第17図 押型文土器文様復原図



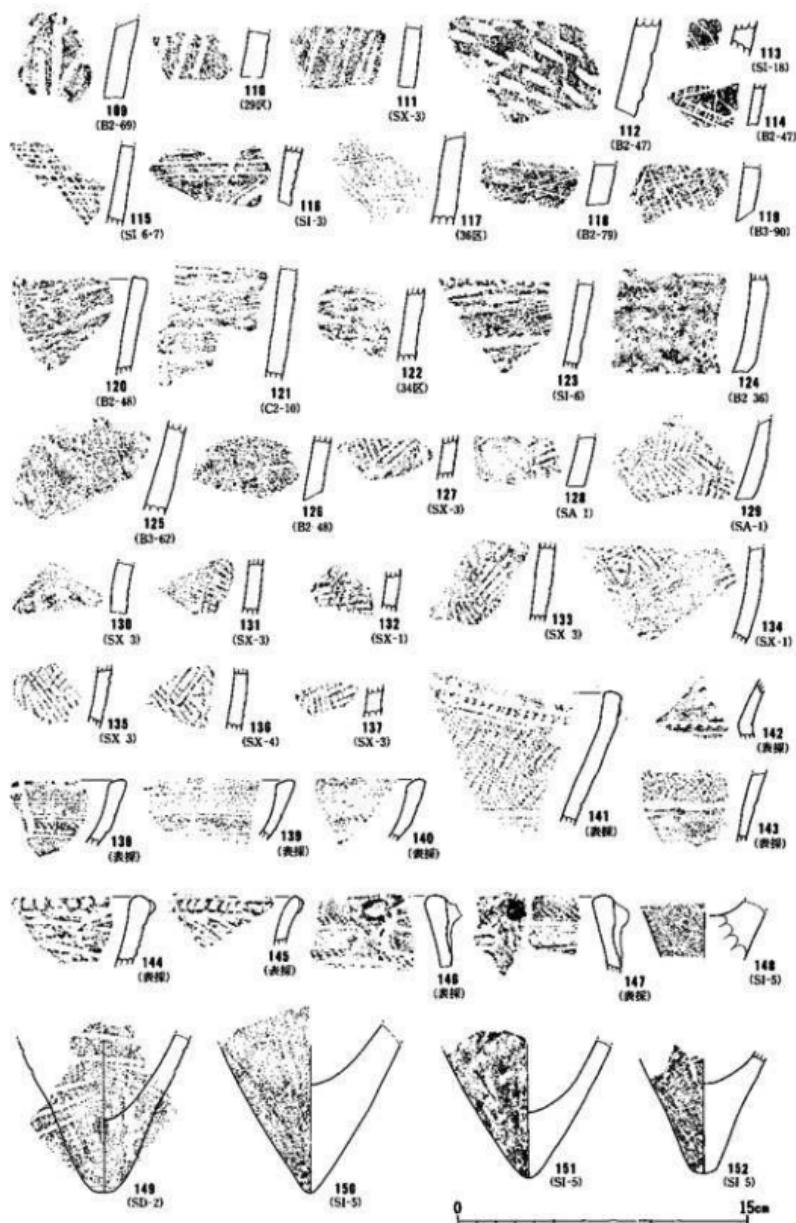
第18圖 繩文時代遺物出土狀況圖



第19図 繩文土器 (1)



第20図 繩文土器 (2)



第21図 繩文土器 (3)

縄文時代石器（第22図）

本遺跡では、早期の土器と共に157点の礫が検出され、特にB2区で密度の濃いまとまりが認められた。内7点に接合関係が確認されたが、被熱した礫は検出されていない（第18図）。本遺跡では総数で2点の石器が出土している。1は凝灰岩製の断面三角形の磨製石器で、平面形態は楔形と推定される。三面は丁寧に研磨され、下端は片刃状を呈し、弱い研磨痕が認められる。2はホルンヘルス製の磨石で、下端の研磨が著しく、側面に弱い叩き痕が認められる。いずれも早期の所産であろう。

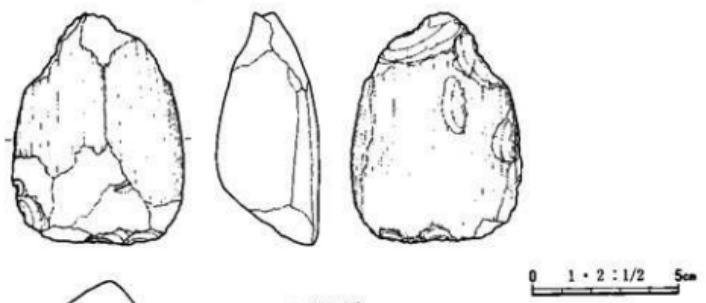
旧石器時代の石器（第22図、図版25）

縄文早期の包含層から単独出土した石器であるが、剥片生産技術と石器の形態等から旧石器時代の遺物として捉えられる石器が1点出土した。

3は石刃を素材とした彫器である。石刃の末端部に2条の楕状剝離が行われている。楕状剝離痕と側縁の二次加工は、二次加工の方が新しく、楕状剝離の後に二次加工を施していることが観察される。両側縁には微細剝離痕が連続的に認められる。打面部側は折れおり、捻り折ったような剝離面である。石材は淡いチョコレート色をした珪質頁岩である。石器製作技術や石材の特徴から、第2黒色帶上部から出土する石器に共通した特徴がある。長さ78.8mm、幅27.98mm、厚さ5.4mm、重量11.3g、遺物番号32-33-4。

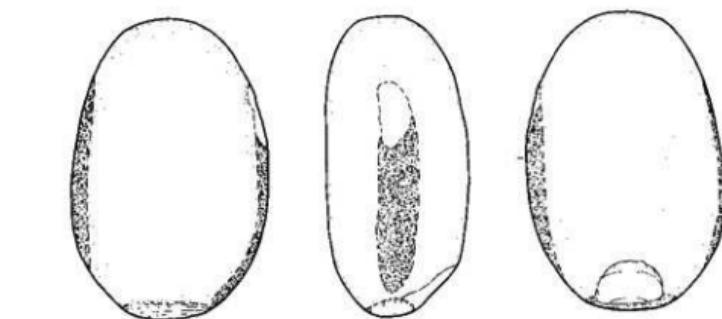
〈参考文献〉

- 西川博孝 1980 「三戸式土器の研究－千葉県舟塚原古墳封土出土土器を中心として－」
「古代探叢」
- 西川博孝 1987 「田戸下層式土器－千葉県内の新資料を加えた検討－」『古代』第83号
- 山内清男 1935 「古式縄紋土器研究最近の情勢」『ドルメン』4-1

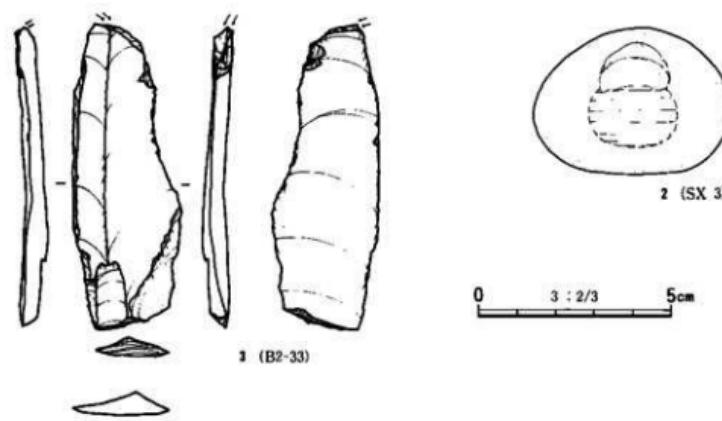


1 (B2-85)

0 1 : 2 : 1/2 5cm



2 (SX 3)



3 (B2-33)

第22図 石器実測図

2 節 弥生時代住居出土の土器

SI 11 (第23図、図版20)

1は壺である。色調は乳橙色から乳褐色で、胎土中には石英等の微細石粒が普通量含まれている。複合口縁で、頸部には附加条の細繩文が施文されている。部位によっては、一見羽状のように見えるところもあるが、2段に分かれて施文されているようである。口唇部平坦面にも同様の繩文が施文されている。

2は高杯である。脚部中位以下を欠失している。色調は部位によってかなり異なり、脚部内面は炭素吸着による黒色、それ以外の部分は乳褐色から、赤橙色である。杯部外面はヘラケズリによる調整かと考えられるが、全体に摩耗が進んでおり観察不能である。

3 節 古墳時代住居出土の土器

SI 1 (第23図)

1は土師器壺の胴部中位以上の資料である。口縁の形態は直立気味で端部は外面に向かって丸められている。内面は横方向のヘラケズリ後に粗い縱方向のヘラミガキが行われている。色調は橙褐色で胎土中には酸化鉄流、石英粒が多く含まれている。焼成は普通である。2は土師器壺底部付近の資料である。色調は外面が乳褐色、内面が赤橙色で胎土中には石英粒等を普通に含む。底部外面には木葉痕が明瞭に残っている。

SI 3 (第23・24図、図版20)

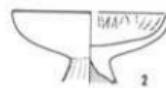
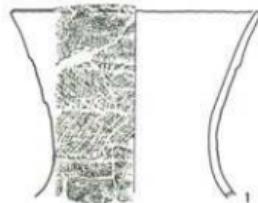
1から6は土師器杯である。1は器表面全面が黒色処理されている。器肉は灰褐色で、酸化鉄粒、石英粒が少し含まれ、焼成は普通である。2は器表面が暗褐色、器肉が乳褐色、酸化鉄粒、長石粒を多く含み、焼成は良い。3は器表面が黒褐色から暗赤褐色、器肉が橙褐色で酸化鉄粒、石英粒等を多く含む。焼成は普通である。4は器表外面が暗赤褐色、それ以外の部分は赤橙色である。長石粒等を普通に含み、焼成は普通である。5・6は外面底部付近を除く器表面に赤彩が施されている。外面底部に黒斑があり、器肉は乳褐色である。5は酸化鉄粒、長石粒をやや多めに含み、焼成は良い。6は酸化鉄粒、雲母粒を少し含み焼成は普通である。

7から9は鉢形の土師器である。7は橙褐色から赤橙色。酸化鉄粒、石英粒を多く含み、焼成は普通である。8は部位によって橙色、黒褐色、赤橙色、酸化鉄粒、石英粒を多く含み、焼成はやや悪い。9は内面黒色、外面赤橙色、器肉灰褐色、石粒量多く焼成は普通である。

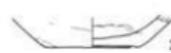
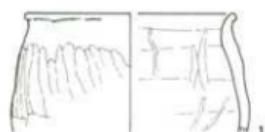
10・11は手捏ね土器である。

12・13は土師器高杯である。12・13ともに器肉の一部が黒色でそれ以外の部分は赤橙色である。酸化鉄粒、石英粒、長石粒をやや多めに含み、焼成は良い。

SI 11

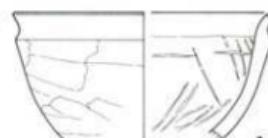
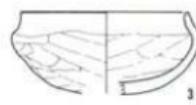


SI 1



0 S : 1/4 20cm

SI 3



第23図 SI 11・SI 1・SI 3出土土器実測図

14は土師器甌である。外面に黒斑があり、それ以外の部分は橙褐色である。胎土中には長石粒、石英粒等が多く含まれ、焼成は普通である。

15から18は土師器甌である。15は小型の甌で、下膨らみの胴部と短く直線的わずかに開く口縁部に特徴がある。色調は赤橙色で内面のみ黒ずんでいるが、これは使用痕ではなく焼成時のものであろうと考えられる。長石粒、石英粒等を多く含み、ザラザラしている。焼成はやや悪い。16は橙褐色で、酸化鉄粒、石英粒等をやや多めに含み焼成は良い。17はかなり大型の甌である。残存部分で復原できる最大径は33.8cmである。口縁部分は短く直線的で、わずかに開く。口縁部外面はかなり上方までヘラケズリが入っている。色調は破片によって大きく異なり、橙褐色、暗褐色、黒色で、酸化鉄粒、石英粒等をやや多めに含み、焼成はやや悪い。18は口唇端部側面をきれいに面取りしてある。内面は剥離がひどく調整技法の観察および図化は不能であった。色調は器肉が褐色、器表外面が橙褐色から暗褐色、内面が赤橙色から暗褐色で、胎土中には石英粒を非常に多く含み、焼成は普通である。

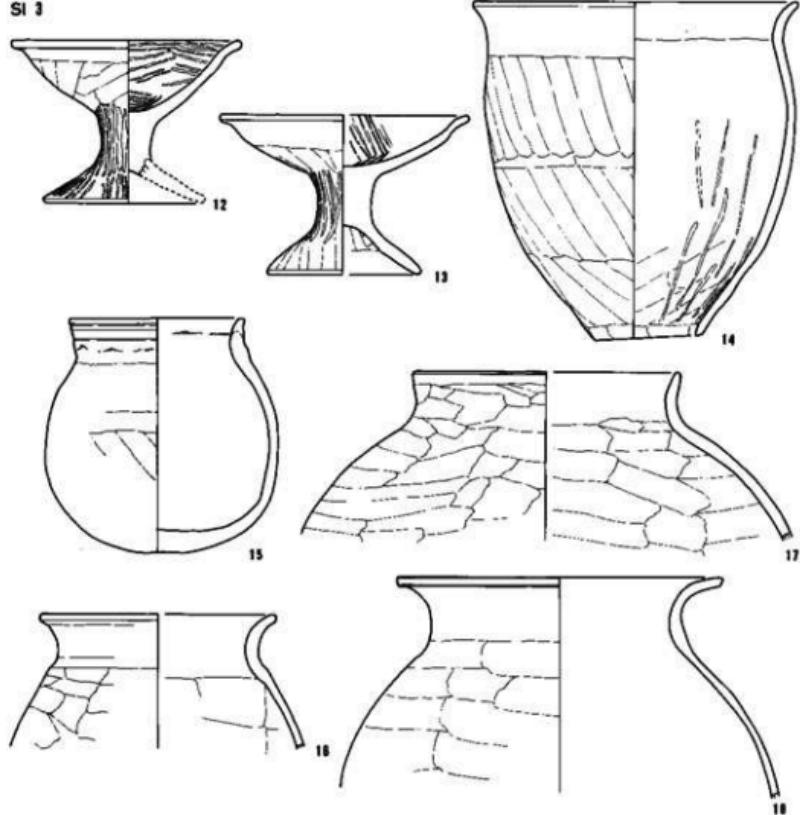
SI 4 (第24・25図、図版21)

1から5は土師器杯である。1はかなり偏平な器形で、色調は器肉が乳褐色、器表外面が暗褐色、内面が褐色である。胎土中に雲母粒を少し含み、焼成は良い。2の器表面は内外面全面を炭素吸着によって黒色処理した後に、かなり剥げてはいるが内外面全面に刷毛塗りによる塗塗り処理を行っている。器肉色調は灰色で、長石粒等を少し含み、焼成は良い。3は器表面内面の摩耗がひどいために観察・図化できなかったが、外面底部がヘラミガキによって調整されていることから考えても、ヘラミガキ調整であった可能性が高いであろうと考えられる。色調は器表外面がやや濃い灰色、器肉中央が灰色、その周辺および器表内面が乳褐色である。長石粒等を少し含み、焼成はやや悪い。4はやや濃いめの乳橙色で、胎土中にやや大粒の石英粒等を多く含んでいる。焼成は良い。5は全体に器表面の摩耗が進んでいる。器表内面の調整は横方向のナデである。色調は器表外面が黒褐色で、それ以外の部分は乳橙色である。胎土中には酸化鉄粒、長石粒等を少し含み、焼成は普通である。

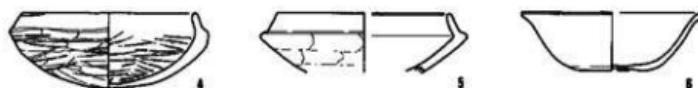
6はロクロ土師器杯で、明らかに混入品である。底部外面は手持ちヘラケズリで調整されている。色調は乳橙色で、酸化鉄粒、長石粒等をやや多めに含み、全体にサラサラした質感を有している。焼成は良い。本遺跡の調査区内の竪穴住居は古墳時代後期が大半で、SI 17が古墳時代最終末、SX 3の方墳が8世紀初頭であるから、このロクロ土師器の属する時期の遺構は調査区内には存在していない。したがって、該期の集落が調査区の周辺に存在していた可能性がある。

7から9は土師器甌である。完形品ではなく、上半もしくは下半のみの資料である。1は全体に乳褐色で、外面に黒斑がある。酸化鉄粒、石英粒等をやや多めに含み、焼成は普通である。

SI 3



SI 4



0 S : 1/4 20cm

第24図 SI 3・SI 4出土土器実測図

8は外面に黒斑があり、器表内面は赤橙色、それ以外の部分は乳橙色である。酸化鉄粒、長石粒等をやや少なめに含み、焼成はやや悪い。外面には剥離部分がある。9は常縫型甕と考えられる。外面に黒斑があり、器肉は乳黄色、外面は赤橙色から乳橙色、内面は黒灰色から乳黄色である。石英粒等を多めに含み、全体にザラザラである。焼成は良い。

10は手捏ね土器である。色調は器肉が暗赤橙色、外面が黒色、内面は暗赤橙色である。酸化鉄粒等を普通に含み、焼成はやや悪い。

SI 5 (第25図、図版21)

1は須恵器蓋である。外面上方の平坦部分は回転ヘラケズリで調整されている。内面口唇部のやや内側には一条沈線が巡っている。色調は淡灰色で、やや大粒の石英粒を多めに含み、焼成は良好である。

2から4は土師器杯である。2は内面全体と外面上半に漆塗りが施されている。素地色調は黄土色で、石英粒等を少し含み、焼成は良い。3は器肉中央が黒灰色、器表面が乳橙色で、雲母粒等を少し含む。焼成は良いが器表面はやや摩耗している。4は深めで鉢と呼んでも良いような器形である。色調は部位によってことなり、橙褐色から黒色である。酸化鉄粒、石英粒等を多く含み、焼成は普通である。

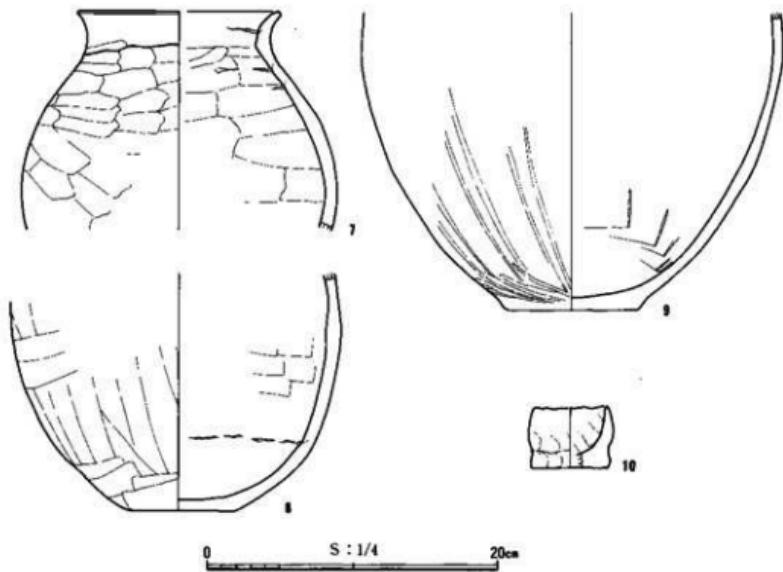
5・6は土師器甕である。5は内面が黒色、それ以外の部分は赤橙色である。石英粒、長石粒、酸化鉄粒等を多めに含み、焼成は普通である。6は器内が赤橙褐色、内面が暗橙褐色、外面が橙褐色である。酸化鉄粒等をやや多めに含み、焼成は普通である。

SI 6 (第25・26図、図版21・22)

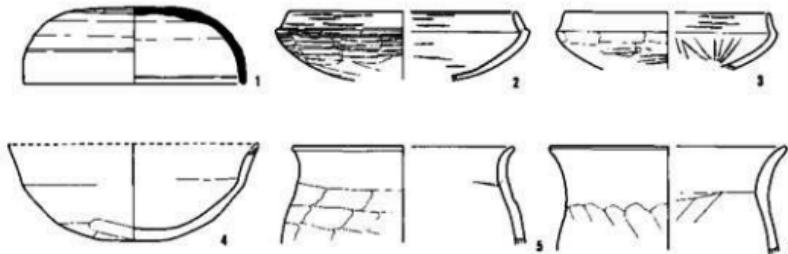
1から6は須恵器蓋と杯である。1・2ともに外面上方を回転ヘラケズリで調整している。1は淡青灰色で、外面には一部自然釉がかかっており、やや黒っぽい。鉄粒、やや大粒の石英粒を少し含み、焼成は良好である。2は淡青灰色で、やや大粒の石英粒を少し含み、焼成は良好である。内面口縁端部から1cmほど上の部分に、段がある。須恵器杯は3を除く4から6は受け部と口縁部の境の付け根部分に沈線が巡っている。3は淡灰色で石英粒を少し含み、全体にサラサラである。焼成は良好だる。4は外面が濃いめの青灰色、他は青灰色で、鉄粒、石英粒を少し含み、焼成は良好である。形態的にはややいびつである。5は全体が灰白色で、外面底部に緑色の自然釉が厚く付着している。鉄粒、石英粒を少し含み、胎土内には大きな気泡が沢山できていびつになっている焼成は良好である。6は暗青灰色で、外面に自然釉が薄くかかっており、内面中央はやはり自然釉かと思われるが、やや銀化している。焼成は良好である。

7・8は土師器杯である。両者ともに遺存部分の観察から、器表全面に漆塗りが施されていたと考えられる。ともに胎土中の混和物は少なく焼成は良い。8は7に比べてやや摩耗が進ん

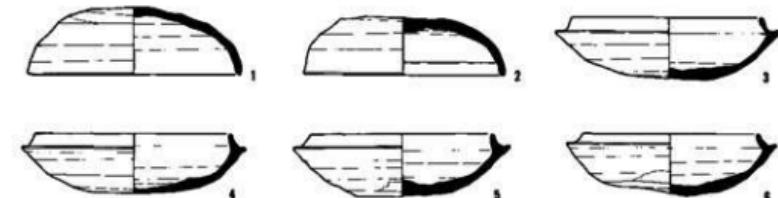
SI 4



SI 5



SI 6



第25図 SI 4・SI 5・SI 6出土土器実測図

でいる。

9は形態的には大型の土師器杯のように見えるが、底部外面がヘラケズリによってややえぐれ気味の平底になっていることから、機能的には本来「鉢」であったろうと考えられる。色調は内面が黒色で他の部分は乳褐色であるが、外面口縁部付近に漆塗りの痕跡が見えることから、もともとは全面に漆が塗られていたのではないかと考えられる。胎土中の混和物は少なく、焼成は普通である。

10・11は土師器甕である。10は底部外面に木葉痕が残っている。11は器肉中央が黄土色、器表は内外面ともに赤橙色である。外面には黒斑が見える。酸化鉄粒、石英粒等やや大粒の石粒を多く含み、焼成は良い。底部外面は無調整である。

SI 7 (第26図、図版22)

1は土師器杯である。色調は赤橙色で、外面には部分的に黒斑が見える。胎土中に酸化鉄粒、石英粒等を普通に含み、焼成は普通である。底部付近の器肉が普通の杯に比べて極端に薄いことに特徴がある。

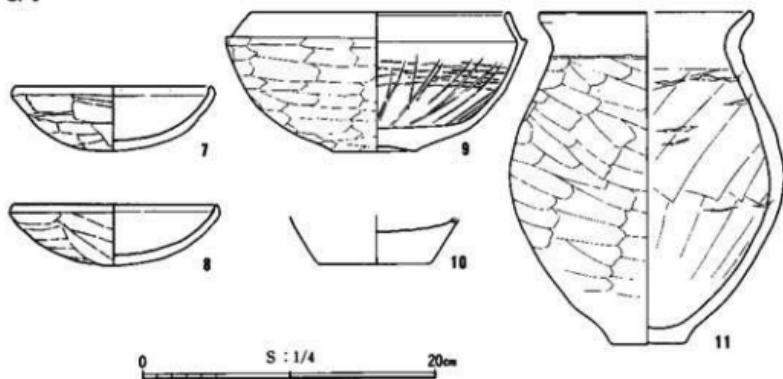
2・3は土師器甕である。2は底部外面を欠失している。全体に摩耗が進んでいたために調整技法は明確にできない。色調は赤橙色で石英粒をやや多めに含む。3は常規型甕である。色調は全体に乳橙色であるが、内外面ともに固化部分の上から2/5ほどから下の部分は使用痕によるものと考えられるが、黒っぽくなっている。胎土中に雲母粒、石英粒を少し含み、焼成は良い。

4は土師器小型短頸甕である。全体に摩耗が進んでおり調整技法の図化は不能である。色調は乳橙色で、石英粒等を多く含み、焼成は良い。

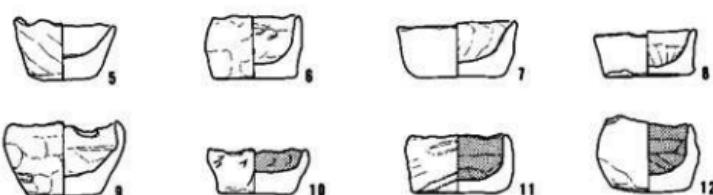
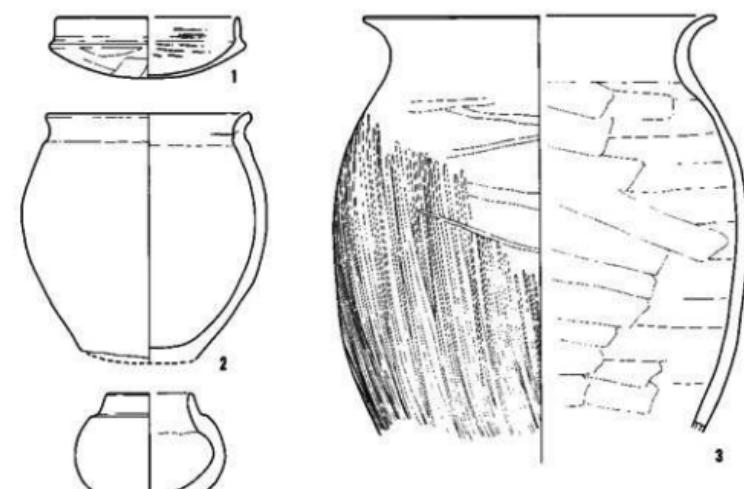
5から12は手捏ね土器である。本遺跡中では一遺構から最も集中して検出された例である。全体に共通した技法は、調整はナデによっており、底部外面は無調整であるということである。

5は暗赤橙色で、酸化鉄粒、石英粒を普通に含み、焼成は普通である。6は赤橙色で、石英粒等をわずかに含み、焼成は普通である。7は赤橙色で、酸化鉄粒、石英粒等を少し多めに含み、焼成は普通である。8は他の個体とやや異なり内面を放射状のナデで調整している。色調は赤橙色で、石英粒等を普通に含む。焼成は良い。9は赤橙色で、外面に黒斑を有している。石英粒等をわずかに含み、焼成は良い。10から12は内面が黒色である。これはいわゆる「伏せ焼き」による炭素吸着と考えられる。10は外面の色調は赤橙色で石英粒等を少し含み、焼成は良い。11は外面赤橙色で、酸化鉄粒、長石粒を普通に含み、焼成は良い。12は外面赤橙色で、酸化鉄粒、石英粒を多めに含み、焼成は良い。

SI 6



SI 7



第26図 SI 6・SI 7出土土器実測図

SI 8 (第27図、図版22・23)

1から6は土師器杯である。1は器肉が黄土色で、器表面は内外ともに乳橙色である。酸化鉄粒、石英粒を多く含み、焼成は良い。2は内外面ともに器表面を樹脂仕上げによって処理している。器肉の色調は乳橙色で、石英粒、雲母粒を多く含み、焼成は良い。3はやはり内外面樹脂仕上げであった可能性が高いが、観察できる部分が図で示したように限られている。器肉色調は乳橙色であり、酸化鉄粒、長石粒等をやや多めに含み、焼成は良い。4・5は器表内面を伏せ焼きによる炭素吸着で、黒色処理してある。4は器肉が褐色、器表外面は暗褐色である。酸化鉄粒、雲母粒を少し含み、焼成は普通である。5は器肉、器表内面乳橙色で、石英粒、長石粒、酸化鉄粒を多く含み、焼成は良い。6は大型の杯であり、鉢として使用されていた可能性が高い。色調は乳橙色で、酸化鉄粒等の大粒の石粒を多く含み、焼成は普通である。

7は手捏ね土器で外面底部に木葉痕が見える。色調は乳橙色で、酸化鉄粒、長石粒、石英粒等を多く含み、焼成は普通である。

8・9は土師器甕である。8はやや小型のもので、口縁端部を欠失している。赤橙色で大粒の酸化鉄粒、石英粒等を多く含み、焼成は普通である。底部外面はヘラケズリで、内面はやや強いナデによって調整されている。9はやはり底部外面をヘラケズリで調整している。色調は赤橙色で、内外面ともに一部黒っぽい。酸化鉄粒、石英粒等を普通に含み、焼成は良い。

SI 9 (第27図、図版23)

1・2は土師器杯である。1は器肉が橙褐色、器表面は内外面ともに上半が赤橙色、下半が黒褐色である。酸化鉄粒、石英粒等を少し含み、焼成は良い。2は器表面全面に漆塗りが施してある。器肉は乳黄色で、酸化鉄粒、雲母粒等をわずかに含み、サラサラである。焼成は良い。

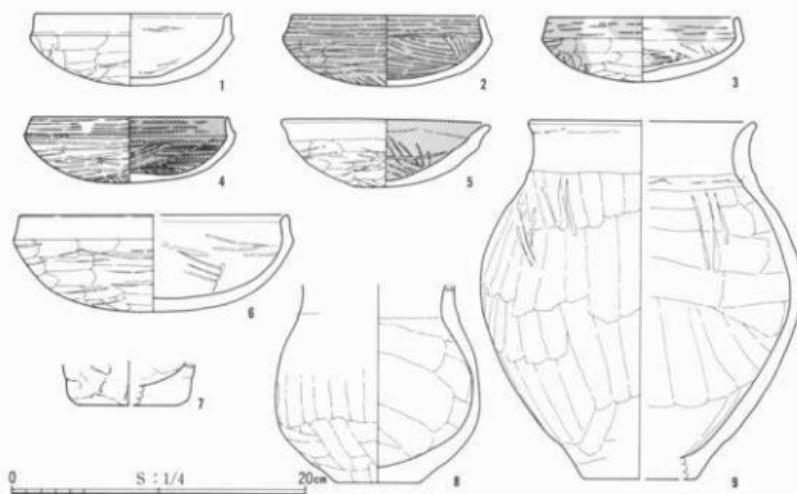
3は土師器鉢である。器表面は全面黒色であるが、技法は樹脂仕上げなのか炭素吸着なのか判別できない。器肉は赤橙色で、酸化鉄粒、石英粒等を含む。焼成は良い。

4から6は土師器高杯である。4は炭素吸着で内面黒色である。他の部分の色調は赤橙色で、酸化鉄粒、石英粒等を多く含み、ザラザラしている。焼成は良い。5は深めで小型の高杯杯身であると考えられる。色調は橙褐色で、外面に黒斑がある。酸化鉄粒等を多めに含み、焼成は良い。6はやはり深めで小型の高杯の脚部である。器肉は乳橙色、器表は暗褐色で、酸化鉄粒、石英粒を多く含み、焼成は普通である。

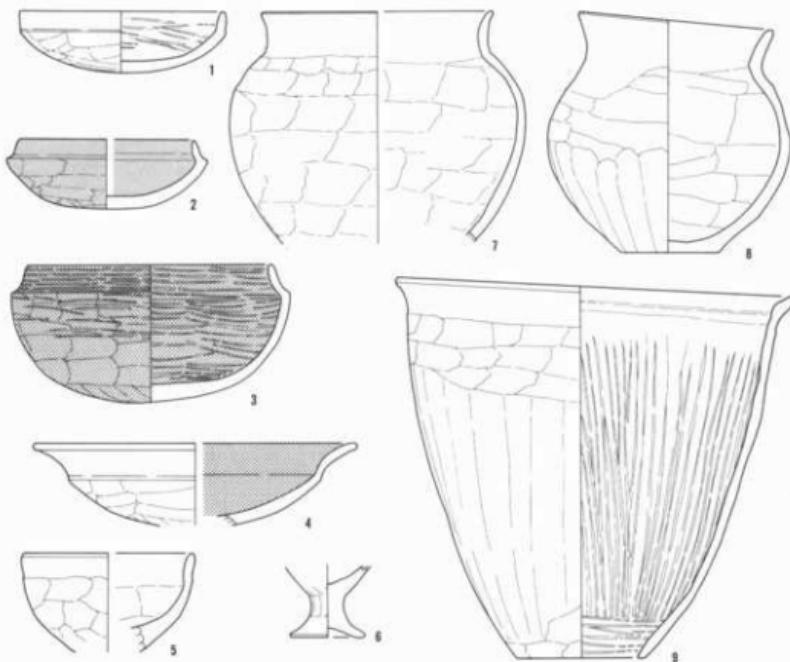
7・8は土師器甕である。7は内面黒褐色、それ以外の部分は橙褐色で、石英粒等を多く含み、外面は摩耗が進んでいる。焼成は普通である。8は暗赤橙色から橙褐色で、石英粒、酸化鉄粒等を多く含み、焼成は普通である。

9は土師器甕である。色調は橙褐色で、外面に黒斑がある。酸化鉄粒などの石粒を多く含み、焼成は良い。

SI 8



SI 9



第27図 SI 8・SI 9出土土器実測図

SI 10 (第28図、図版23)

1から3は土師器杯である。1は乳橙色で胎土中に雲母粒、粘土ダマを少し含み、全体にサラサラしている。焼成は良いが摩耗が進んでいる。2は橙褐色で、外面底部に黒斑が見える。長石粒をやや多めに含み、焼成は普通である。内面底部付近には粗いヘラミガキが施されている。3は橙褐色で、長石粒等の石粒をやや多めに含む。焼成は良い。

4は土師器鉢である。底部はヘラケズリによってやや平底気味になっている。色調は橙褐色で、酸化鉄粒等を多く含む。焼成は良い。

5から8は土師器甕である。5は寸詰まりでやや球胴気味であるが、底部はヘラケズリによって、平になっている。内面胴部中位が黒褐色で、それ以外の部分は橙褐色である。長石粒をやや多めに含み、焼成は良い。6は器肉が褐色、内外面は橙褐色で、内面は一部黒褐色である。酸化鉄粒、長石粒を普通に含み、焼成は普通である。7は5のように寸詰まり気味の器形であろうと考えられる。外面は煤で黒色になっており、それ以外の部分は橙褐色である。酸化鉄粒、長石粒等をやや多めに含み、焼成は普通である。8は長胴の甕の下半部である。底部外面は無調整で、色調は外面が部分的に黒色、それ以外の部分は橙褐色である。酸化鉄粒、長石粒をやや多めに含み、焼成は普通である。

9は当初中空のカマド支脚であろうかと考えたが、断面観察から接合方法が逆であることが分かり、器種不明土師器とした。色調は橙褐色で、外面は被熱しているように見える。長石粒等を多く含み、焼成は普通である。内面には粘土紐接合痕が明瞭に見える。外面は縦方向のナデ、内面は横方向のナデで、底部外面は無調整である。10は手捏ねである。

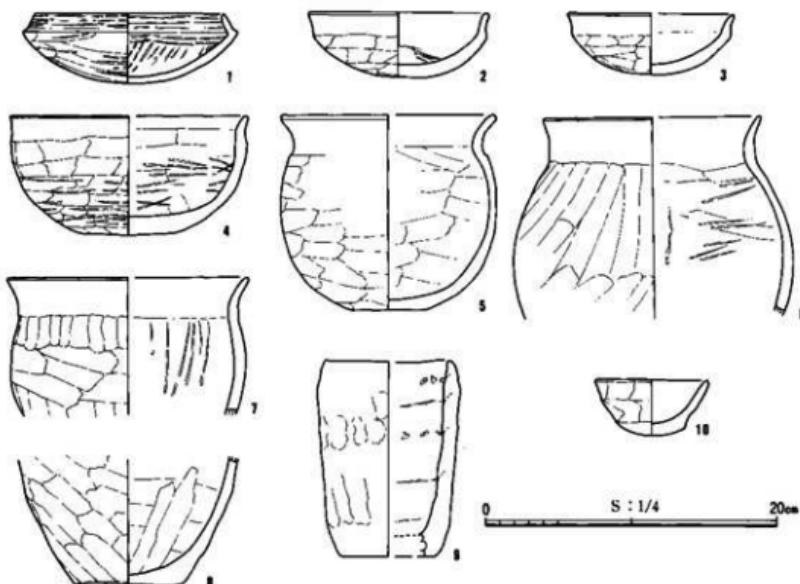
SI 12 (第28図)

1から3は土師器甕である。1は口縁部の上半を欠失している。色調は外面の胴部大半が煤の付着によって黒色で、それ以外の部分は乳橙色である。石英粒を多めに含み、焼成は良い。2は底部付近の資料で、底部外面には木葉痕が見える。色調は外面が被熱によって黒褐色で、それ以外の部分は乳橙色である。雲母粒、石英粒等を少し含み、焼成は普通である。内面はヘラナデによって調整されている。3は常総型甕である。外面全体と内面底部付近は黒色、それ以外の部分は乳橙色である。石英粒、雲母粒を多く含み、焼成は良い。全体に摩耗が進んでいる。底部外面はヘラケズリによって調整されている。

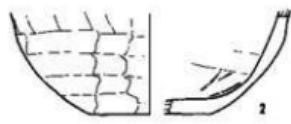
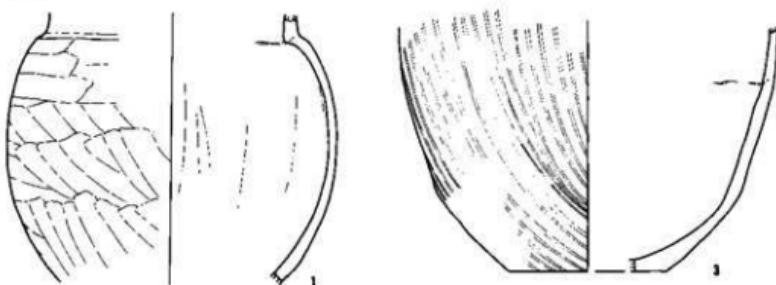
SI 13 (第28図)

1に示した甕口縁部付近の資料が、本住居出土資料中で図化できる唯一の資料である。これもごく小片から復原したものである。色調は器表外面が赤橙色、それ以外の部分は暗褐色である。酸化鉄粒、石英粒、長石粒等をやや多めに含み、焼成は良い。

SI 10



SI 12



SI 13



第28図 SI 10・SI 12・SI 13出土土器実測図

SI 14 (第29図、図版23・24)

1・2は須恵器蓋である。1は暗青灰色で、石英粒、粘土ダマをやや多めに含む。焼成は良好である。外面は段付近まで回転ヘラケズリで調整されている。2は遺存状況のあまり良くない小破片から復原実測したものである。色調は黒灰色で、器表外面には灰色の自然釉がのっている。胎土中には混和物がほとんど無く、焼成は良好である。口唇部内側には弱い段が設けられている。

3・4は土師器杯である。3は器肉が乳橙色で、器表面は内外面ともに橙色である。胎土中には石英粒等をやや多めに含み、焼成は普通である。4は器肉が乳褐色、器表面は内外面ともに赤橙色で、外面底部と内面口縁部が黒褐色である。胎土中には石英粒等を多めに含み、焼成は普通である。

5は須恵器蓋の把手部分である。色調は灰白色で、雲母粒、石英粒等を少し含み、焼成は良好である。

6・7は土師器壺である。6は器肉が黄土色、器表面は内外面ともに赤橙色である。石英粒等をやや多めに含み、焼成は普通である。胴部内面はナデ調整である。7はほぼ完形に近いもので、器肉は乳褐色、器表面は内外面ともに淡橙褐色で、底部外面のみ黒色である。酸化鉄粒、石英粒等を多く含み、焼成は良い。底部外面はヘラケズリによって調整されている。

SI 15 (第29図)

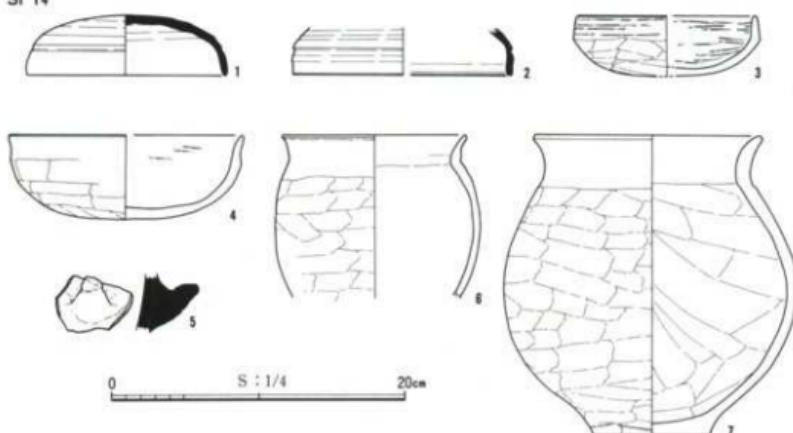
1から3は土師器杯である。1は乳橙褐色で、外面口縁部の一部と、内面底部の一部に赤彩痕跡があり、本来は全面赤彩であった可能性が高い。2は赤橙色で、胎土中には酸化鉄粒等をやや多めに含み、焼成は普通である。ただし、全体に摩耗が進んでいる。3は胎土中の混和物がほとんど無くサラサラで摩耗が進んでおり、調整技法の観察は不能である。色調は乳橙色で、焼成は良い。

4・5は土師器高杯である。4は乳橙色で内面口縁部の一部に赤彩の痕跡が見える。酸化鉄粒を少し含むが、全体にトロトロで摩耗がひどく、調整技法の観察は不能である。焼成は良い。5もやはりトロトロで摩耗がひどい。色調は乳橙色で、焼成は良い。両者は器質、色調ともによく似ているが、同一個体であるかどうかは断定できない。

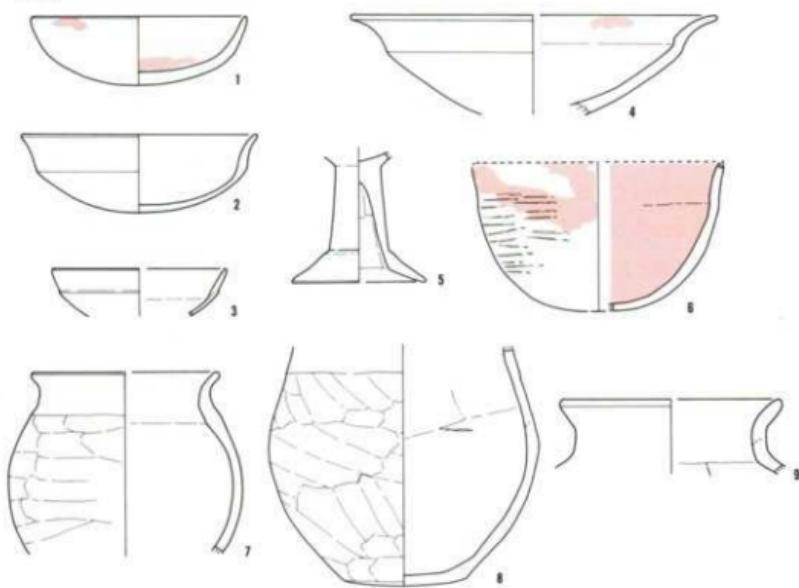
6は土師器鉢である。素地は乳橙色で、底部は内外面ともに黒色である。器表内面全体と外面口縁部付近には赤彩が施されている。焼成は良い。

7から9は土師器壺である。9は橙褐色で、酸化鉄粒などを多く含む。焼成は普通である。8は全体に橙褐色で、器表外面は胴部のやや上の方から下、内面は胴部下位から下が使用痕として煤が付着し、黒色になっている。酸化鉄粒、石英粒、粘土ダマ等を多く含む。焼成は普通である。9は暗赤褐色で、酸化鉄粒、石英粒等を多く含み、焼成は普通である。

SI 14



SI 15



第29図 SI 14・SI 15出土土器実測図

SI 16 (第30図、図版24)

1から3は土師器杯である。1は器表内面を樹脂仕上げによって器面処理している。器肉の色調は乳橙色である。酸化鉄粒等を少し含み、焼成は普通である。2は褐色で、器表内面の一部に漆塗りの痕跡が見える。酸化鉄粒、石英粒等をやや多めに含み、焼成は良い。器表面はやや摩耗している。3は杯としては大型で、鉢として機能していた可能性が高い。器表面の摩耗がひどく、調整技法の図化は不能である。色調は橙褐色で、胎土中には酸化鉄粒を多量に含む。焼成は普通である。

4から7は土師器甕である。4の色調は部位によってかなり異なり、淡褐色から赤橙色である。胎土中には石英粒、酸化鉄粒等をかなり多く含み、焼成は普通である。5は常絶型甕である。口縁端部側面は面取りされている。色調は乳橙色で、胎土中には雲母粒を少し含み、混和物は全体に少ない。焼成は良好である。6は全体に摩耗がひどく、器面調整の図化は不能である。色調は乳褐色から赤橙色で、酸化鉄粒、石英粒等を多く含む。焼成は普通である。7は短い口縁がやや直立気味に開口する小型の甕である。色調は4層構造になっており、断面内側から外側に向けて橙褐色、乳褐色、黒灰色そして赤橙色というようになっている。この個体も器表面の摩耗が進んでおり、調整技法の図化は不能である。酸化鉄粒等を多く含み、焼成はやや悪い。

SI 17 (第30図、図版24)

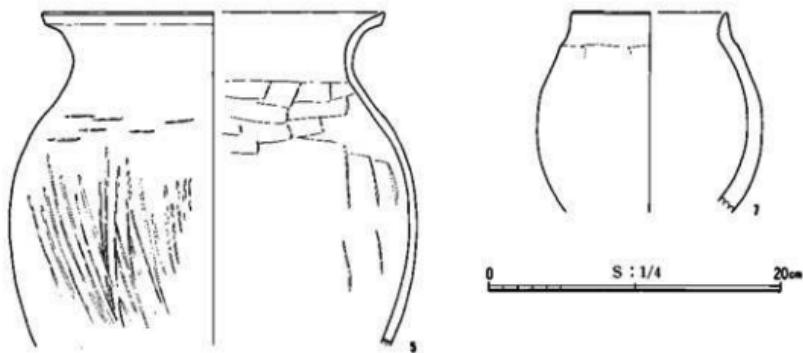
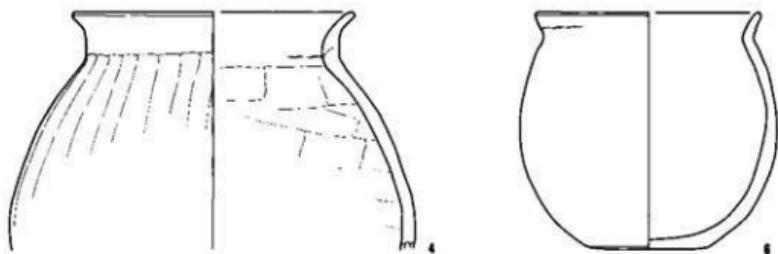
1は土師器杯である。色調は5層構造になっている器肉中央が灰色、その両側が淡褐色そして器表面が赤橙色である。長石粒等を少し含み、全体に混和物は少ない。焼成は土師器としてはかなり硬質に仕上がっている。

2は土師器甕である。暗赤褐色で、石英粒等を含み、焼成は普通である。

SI 18 (第30図)

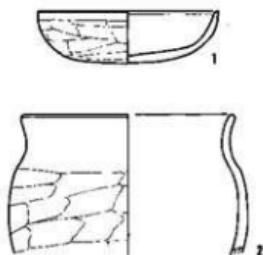
1は土師器鉢である。底部を欠失しているため、平底であったかどうかは不明である。外面胴部中位以下が煤の付着によって黒褐色になっていることから、煮沸具として使用した可能性も考えられる。それ以外の部分の色調は橙褐色で、胎土中には酸化鉄粒等を多く含む。焼成は普通である。

SI 16

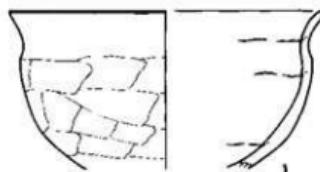


0 S : 1/4 20cm

SI 17



SI 18



第30図 SI 16・SI 17・SI 18出土土器実測図

4 節 古墳出土の土器

SX 3 (第31図、図版24)

1から3は須恵器長頸壺である。2・3の底部外面には回転ヘラケズリが見える。1は素地灰色で、外面肩部分以上、内面は頸部以上に緑色の自然釉がかかっている。鉄粒、石英粒等をわずかに含み、焼成は良好である。2は素地が灰色で、1とほぼ同様の部位に淡緑色の自然釉がかかっているのであるが、外面には縦長に自然釉のかかっていない部分がある。胎土中の混和物、焼成については、1と同様である。3は素地灰色で、外面は肩の部分、内面は口縁部分に自然釉がかかっている。胎土中の混和物、焼成状況については他の2点と同様である。

4は土師器杯である。内面全体と外面口縁部付近には赤彩が施されている。素地の色調は淡褐色で、混和物は少なく、焼成は普通である。

5は土師器壺である。器表外面は赤橙色、それ以外の部分は黒色である。石英粒などを多量に含み、焼成は良い。

6は脚部分であるが、器種名は不明である。色調は乳褐色、胎土中には酸化鉄粒、石英粒をやや多めに含み、焼成は普通である。

5 節 その他の遺構およびグリッド出土の土器

(第31図)

1は土師器高杯の杯部である。器表外面には赤彩が施されている。内面は炭素吸着により黒色、器肉は淡褐色である。胎土中には石英粒が多めに含まれ、焼成は良い。

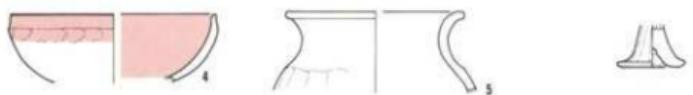
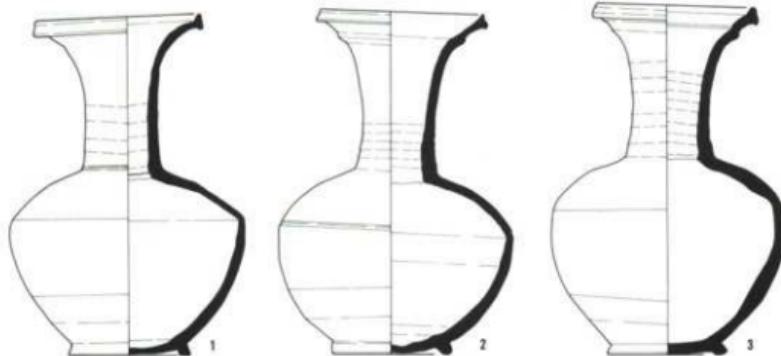
2・3は土師器杯である。2は内外面ともに底部が黒色、それ以外の部分は乳橙色である。混和物は少なく、焼成は普通である。器表面の摩耗がひどく、本来は全面にヘラミガキが施されていた可能性が高い。3は器肉が乳橙色、器表面は暗褐色である。酸化鉄粒をやや多く、雲母粒を少し含む。焼成は良い。

4は土師器壺である。口縁端部は側面が面取り状になっている。器表は内面が暗褐色、外面は赤橙色で、黒斑も見える。石英粒、酸化鉄粒等をやや多めに含み、焼成は普通である。

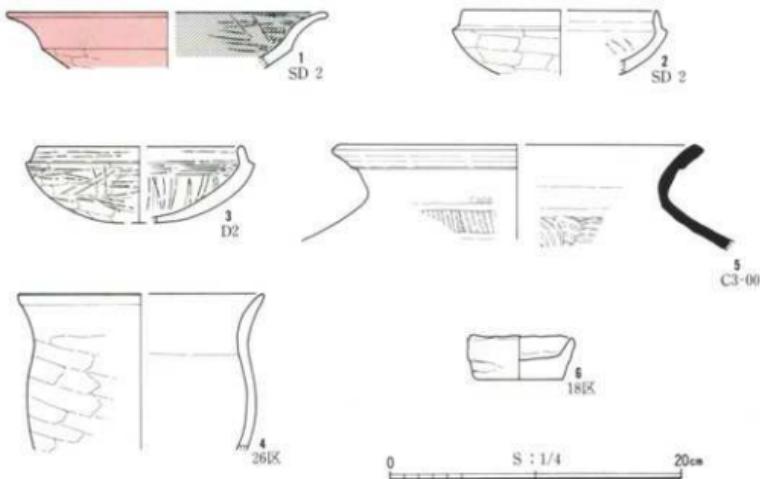
5は須恵器甕である。口縁部外面は幅広の粘土紐を貼り付けて折り返し口縁風に仕上げてある。外面には縦方向の平行タタキ、内面には同心円のタタキが見える。外面の平行タタキは横方向のナデによって擦り消しが入っている。器肉は小豆色で、器表面は黒灰色である。石英粒を少し含み、焼成は良好である。

6は手捏ね土器である。外面底部は無調整である。器肉は暗い灰色がかった橙色で器表面は橙褐色である。石英粒等をやや多めに含み、焼成は普通である。

SX 3



その他の遺構およびグリッド出土の土器



第31図 SX 3、その他の遺構およびグリッド出土の土器

6 節 金属製品・石製品

金属製品（第32図、図版25）

1は鉄製の刀子破片である。刃部中央付近の破片で、切先、茎の部分は遺存していない。2は鉄製の鍋かと考えられる。口縁部外面に稜線が巡っている。遺存状況は極めて悪く、表面には銹による亀裂が細かく入っている。3・4は銅製の煙管である。3は雁首で、羅字の側に条線が巡らされている。火皿付け根と、雁首上面中央に継ぎ目がはしつけられている。4は吸口である。口端部の形状が算盤玉のようになっている。羅字が一部分残っている。5は鉄製馬具一鞍具である。形状から見て、刺金は本来とは逆の方に銹着しているようである。

石製品（第32図、図版25）

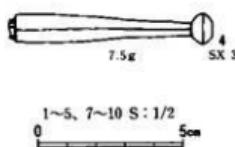
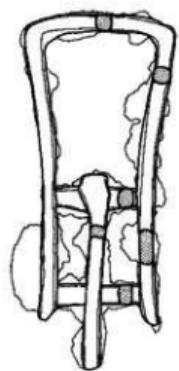
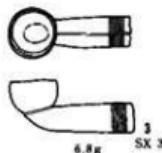
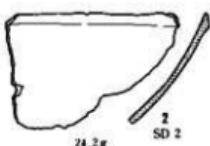
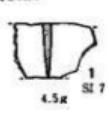
6は垂飾品である。縱長の台形で、上方に2箇所の穿孔が行われている。石材は滑石である。7から10は白色凝灰岩製の砥石である。

7 節 土製品

土玉（第33・34図、図版26）

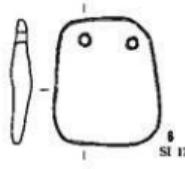
土玉として一括で処理しているが、61～63はあまりにも小振りで、土玉として利用されたものだとは考えられない。また56から60は、外面が細かく面取りされており、その上に外面に赤彩が施されている。これも、土玉の用途を漁撈用と限定するのであれば、やはり除外であろう。

金属製品

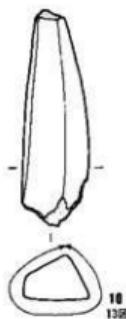
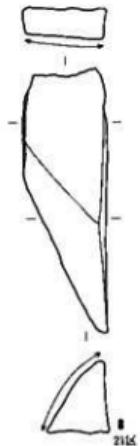
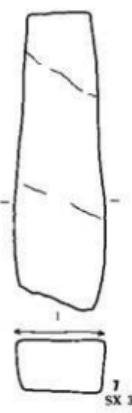


0 5cm

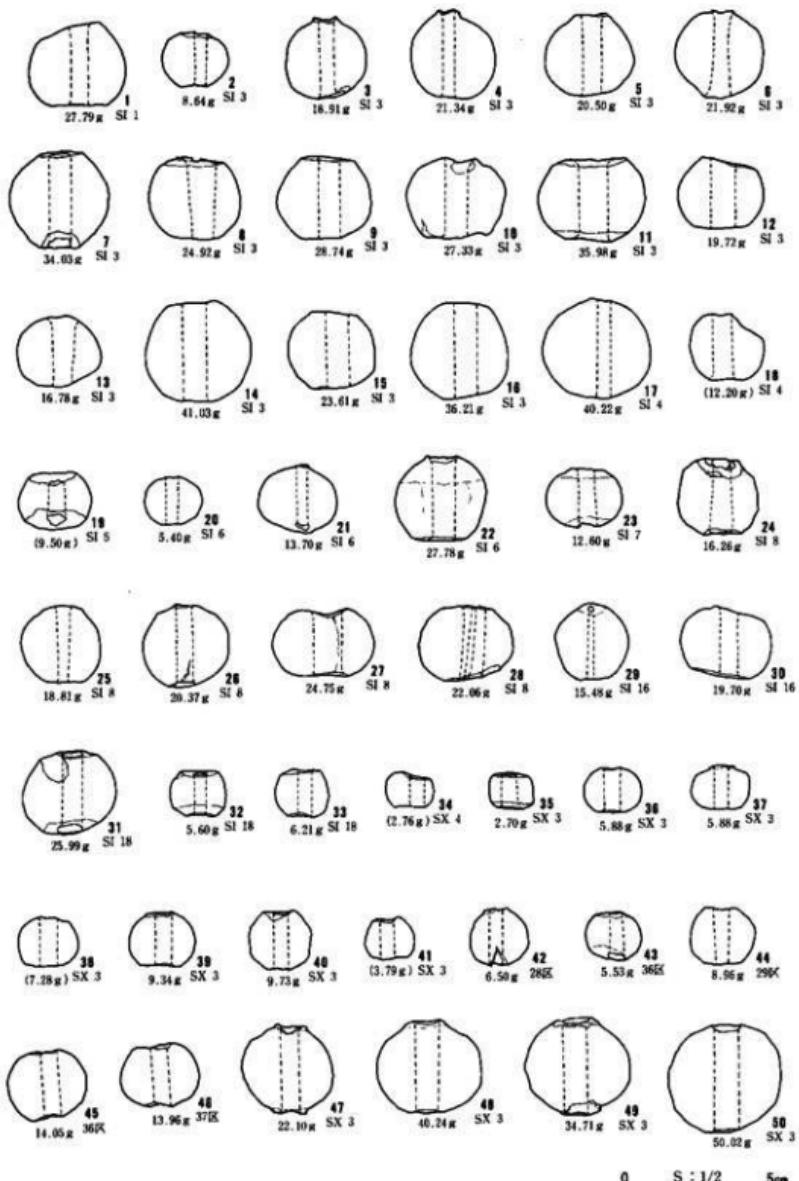
石製品



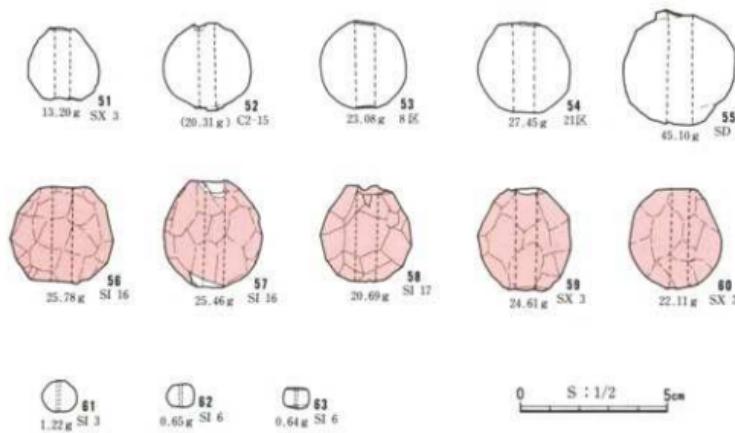
6 S : 1/1 3cm



第32図 金属製品・石製品実測図



第33図 土玉実測図 (1)



第34図 土玉実測図 (2)

3章 まとめ

3章　まとめ

長稻葉遺跡を構成する主たる遺構は、2軒の弥生時代竪穴住居跡、16軒の古墳時代後期竪穴住居跡、古墳時代終末期の方墳1基（一部分だけの検出がさらに1基）、それに調査区内にはわずかに一部分しかかからなかったが、江戸時代の六十六部聖廻國納経塚1基である。このうち集落に関しては、調査区内においてかなり重複した状態で住居跡が検出されている状況から見て、周辺にさらに広がっていくものと考えられる。また、周辺には前方後円墳を含む古墳群が広がっている。それほど規模の大きい古墳群ではないが、SX 3が方墳であるに加えて、SX 4も方墳である可能性が高いことを考慮すると、この周辺において終末期方墳群を構成していたのかも知れない。

ここで、六十六部聖廻國納経塚について若干の考察を加えてみたい。

六十六部聖廻國納経塚 SX 1として報告した平面方形の塚が本文中でも触れたように六十六部聖による廻國納経塚である。この塚から検出されたものは塚頂部で倒壊していた石碑と、この塚の造営時期に直接のかかわりのない可能性の高いSX 2墓壙のみである。墓壙内からは副葬品が検出されておらず、この塚についての考察材料は石碑銘文のみである。

ここで碑文について考えてみる。

〈正面〉元文4年（=1739年）先祖の菩提のために

大乘妙典（=法華經）六十六部を奉納し供養する

11月8日当村（=名木村）安普西心（=施主の名であろう）

〈右面〉南無阿弥陀仏 即法妙詠禪定尼

〈左面〉三界萬靈六親眷屬等

まず、正面の銘文中施主の名に当村としてあるが、僧であれば“当山”とするのが一般的であり、この人物は在俗の人である可能性が高い。次に安普西心の名であるがこれはいわゆる戒名であり、“普”号は浄土宗のものである。次に右面の“南無阿弥陀仏”から宗派として浄土宗もしくは浄土真宗が挙げられるのであるが、先の“普”号から浄土宗に確定できるのである。即法妙詠禪定尼はやはり戒名に相当する。禪定尼は在俗の信仰心の厚い女子のことで、転じて女子の戒名につける語となったものである。安普西心を施主とした場合、この人物が六十六部聖となるのであろう。左面の一文はこのような場合の常套句であり、大意は“すべてのもの”である。

さて、このように近在の人物で浄土宗の宗徒であるということから、周辺の寺を探したところ、明治初期に廃寺となつた“照城寺”があった。香取郡市文化財センターの江尻和正氏のご教示により現在町内冬父の冬父山三世院迎接寺が過去帳を引き継いでいることがわかった。同

寺杉山弘信氏のご厚意により過去帳を拝見させていただいたのであるが、残念ながら安誓西心・即法妙詠禪定尼の両名の名は見あたらなかった。ただし、この過去帳は天保年間に江戸増上寺の学僧によって回向帳として書き直されているものであり、同帳のなかには“安誓□心”、“妙□禪定尼”が何人かづつ見られ、誤写の可能性がないわけではない。また、回向帳には各日のはじめの方に住職名が記されている。そこに“安誓西心”の名がないことから考えても、先にも記したが、彼が在俗の人であった可能性はさらに高いとして良いであろう。

なお、関秀夫氏『経塚』(1985 ニュー・サイエンス社) 及び『千葉県史料金石文篇一・三』によれば、千葉県内の六十六部納經に関わる経筒出土地、及び経筒銘文は以下のとおりである。

・成田市土室坊前 (天文17年・1548)

十羅刹女 野島住慶専

毛奉納法華妙典六十六部聖

三十番神 天文十七年今日月

・成田市 天王船塚11号墳 (年号なし)

十羅刹女 紀弘之住快賢上人

[仏画] 奉納経王一國十二部

三十番神 當年 今月吉日

・香取郡神崎町武田 (天文10年・1541)

十羅刹女 下總之住本願大乗坊

奉納大乗妙典六拾六部敬白

三十番神 天文十年八月□

・山武郡芝山町芝山 (天文9年・1540)

十羅刹女 願主住妙靈為也

毛奉納大乗妙典六十六部 宗□

三重番神天文九年今日月

・香取郡干潟町鏡木字御塚 (永禄3年・1560)

十羅刹女

毛奉納如□□行妙典一□

三十□神

□賛禪定門逆修

永禄□□庚申三月中旬

大□敬白

鏡木信濃守□定

[胤]

・市原市青柳天王岡（大永8年・1528）

十羅刹女 武昌六郷之住呂

毛 奉納大乘妙典六十六部聖圓勝

三十番神 大永八年戊子二月日

関秀夫氏同書引用の『塩尻』には、宝永4年（1707）東武の旭普が板行した六十六部巡拝路として“常州鹿島社 下總香取社 上總一宮 安房清澄寺”が記載されている。本遺跡例や神崎町武田例などは香取社に近く、この記載と大きく矛盾するものではないが、他の例は成田山新勝寺、芝山觀音教寺などが近く、関氏も言うように、廻国する六十六部聖により一定ではなかったのであろうと考えられる。

以上のほかに『千葉県史料』によれば島根県大田市南八幡宮六角堂内鉄塔に納められていた経簡資料中には以下の5点がある。

・下總弘遠口庄飯□

[尽]

十羅刹女 聖源照

毛 奉納大乘妙典六十六部

三十番神 女尾玉

大永四年今月今日

・房山清澄寺住僧

十羅刹女本願目藏上人

毛奉納法華妙典六十六部内

三十番神

永喜二年丁亥今月日（永喜は私年号で大永六年にあたる）

・十羅刹女 上總住僧宗春

毛奉納大乘妙典六十六部

三十番神 享禄二年

・十羅刹女 下總住口□

毛奉納大乘妙典陸拾六部聖

三十番神 天文十六年今月日

・十羅刹女上總之住侶祐心

毛奉納大乘妙典六十六部聖

三十番神當年今月吉日

これらの資料は、逆に六十六部聖として千葉県内から廻国に出た人々の活動を知るうえでの重要な資料である。

第1表 住居構造一覧

No.	平面形	規模(長×短)	面積(m ²)	カマド	主輪方位	支柱穴	その他柱穴	断面穴	附欄	時雨	その他特記事項
1	(方形)	4.29×—	(24.90)	—	(北西壁)	N-13°-W N-54°-W	(2)	出入口P1 なし	—	(全周)	不明
2	橢円形	—×3.95	—	なし	北東壁中央	N-39°-E	4	出入口P1、その他1	—	(全周)	既生後 遺構西半分は調査区境外
3	方形	4.95×4.95	23.59	北西壁中央	N-12°-W	4	出入口P1、その他1	1	SD 4, SI 4—部重複・炭化材・焼土分布	7c. 前	SI 3—部重複・ガマド作持え
4	方形	5.50×5.46	29.01	北西壁中央	N-11°-E	4	出入口P1、その他1	1	SI 3—部重複・SA 1—部重複	6c. 後	SA 1—部重複
5	方形	6.10×6.10	36.18	北東壁中央	N-23°-W	4	支柱P3	2	SI 7—部重複・ガマド作持え	6c. 後	SI 6-8, SD 2重複・上部建物・炭化材分布
6	方形	8.38×8.38	69.31	北西壁中央	N-62°-W	4	出入口P1	1	SI 6-8, SD 2重複・出火材分布	6c. 中	SI 6-8, SD 2重複・出火材分布
7	方形	5.38×5.38	(27.56)	北西壁中央	N-79°-W	4	なし	2	SI 7, SA 1, SD 2重複・出火材分布	6c. 後	SI 10-11, SA 1-2, SD 2重複
8	方形	6.88×(6.54)	(45.05)	南西壁中央	(N-38°-E)	4	なし	1	SI 9-15, SK 1-2重複・一部調査区境外	6c. 後	SI 9-12, SD 2重複
9	方形	4.45×4.82	20.10	北壁中央	N-7°-E	4	なし	1	SI 11-15重複・ガマド作持え・山砂・粘土分布	不明	SI 11-15重複・ガマド作持え・山砂・粘土分布
10	方形	5.58×(5.58)	31.24	(北西壁)	(N-1°-W)	4	なし	1	SI 12-16重複	SI 12-16重複	SI 12-16重複
11	橢円形	3.97×—	—	北端中央	N-1°-W	(2)	支柱P3	なし	SI 15-19X SK 4, SA 1-2, SD 2重複・上部建物	6c. 後	SI 15-19X SK 4, SA 1-2, SD 2重複・上部建物
12	方形	4.78×4.78	22.24	北壁中央	N-3°-W	4	出入口P1	なし	SI 16-H, SK 4-5A 1-2重複・梁筋	6c. 中	SI 16-H, SK 4-5A 1-2重複・梁筋
13	方形	4.90×4.90	(23.91)	北西壁中央	N-28°-W	4	出入口P1	1	SI 17-18X SX 3重複・炭七村少量化分布	7c. 中	SI 17-18X SX 3重複・炭七村少量化分布
14	方形	6.12×6.20	(37.08)	北内壁中央	N-33°-E	4	支柱P3、出入口P1	2	SI 19-H, SK 4-5A 1-2重複・梁筋	7c. 中	SI 19-H, SK 4-5A 1-2重複・梁筋
15	(方形)	—	—	北西壁中央	N-11°-W	(1)	性格不明P1	1	—	—	—
16	方形	4.85×4.80	23.28	北壁中央	N-5°-W	4	なし	なし	SI 13-18 SX 3重複・炭七村少量化分布	7c. 中	SI 13-18 SX 3重複・炭七村少量化分布
17	(方形)	—	(33.89)	—	N-3°-W	4	出入口P1、その他1	—	SI 19-H, SK 4-5A 1-2重複・梁筋	7c. 後	SI 19-H, SK 4-5A 1-2重複・梁筋
18	方形	5.88×	(33.89)	—	(N-1°-E)	(3)	出入口P1、その他1	—	SI 16-SX 3重複	不明	SI 16-SX 3重複

※()は確定できないものについて付してある。

写 真 図 版



図版 2



遺跡遠景
(北側から)



遺跡遠景
(南側から)



遺跡近景



縄文包含層全景



SI 1 全景



SI 2 全景



SI 3 全景



SI 3 贮藏穴
遗物出土状况



SI 4 全景



SI 5 全景



SI 6 全景



SI 6 カマド周辺
遺物出土状況



SI 7・SI 8
全景



SI 7
遺物出土状況



SI 8 貯藏穴
遺物出土状況



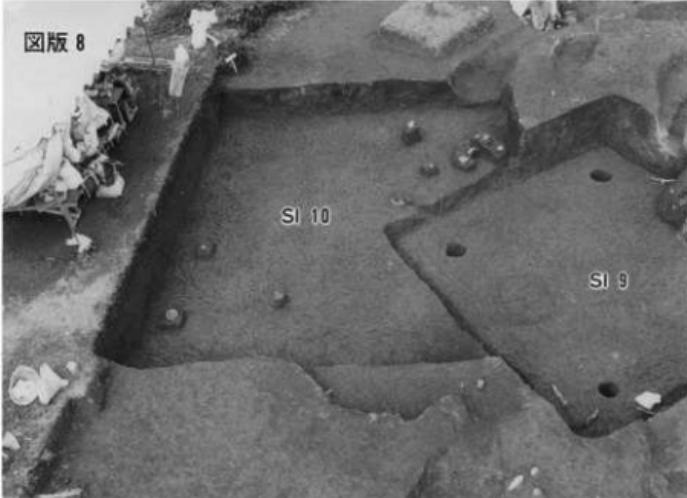
SI 9 全景



SI 9 カマド周辺
遺物出土状況(1)



SI 9 カマド周辺
遺物出土状況(2)



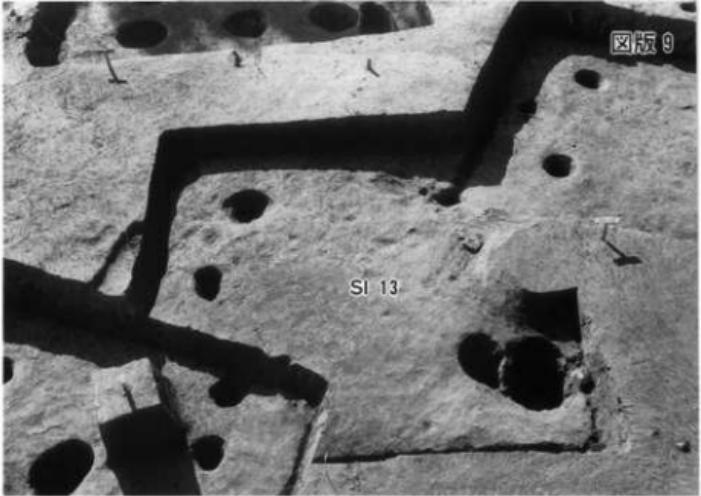
SI 9・SI 10
全景



SI 11 全景



SI 12 全景



SI 13 全景



SI 14 全景



SI 15 全景



SI 15 カマド
遺物出土状況



SI 16・SI 18
全景



SI 17 全景



SX 1
調査前全景



SX 1
土層断面



SX 2 全景
(塙底頭骨)



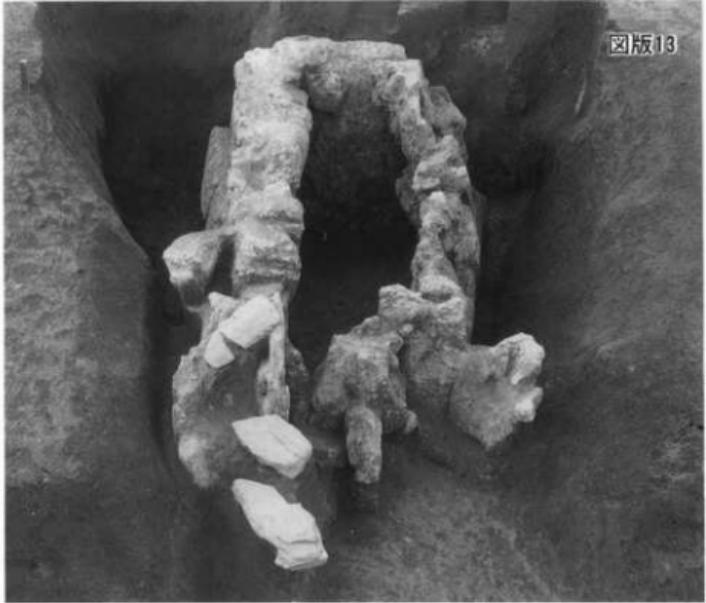
SX 3
全景



SX 3 主体部
検出状況



SX 3 前庭部
遺物出土状況



SX 3
主体部全景



SX 3 主体部
裏込土層断面
D-D'Sec. 南西側



SX 3 主体部
裏込土層断面
D-D'Sec. 北東側



SX 3
主体部奥壁



SX 3
主体部南西側側壁



SX 3 主体部
玄門（奥壁から）



SX 3
主体部全景



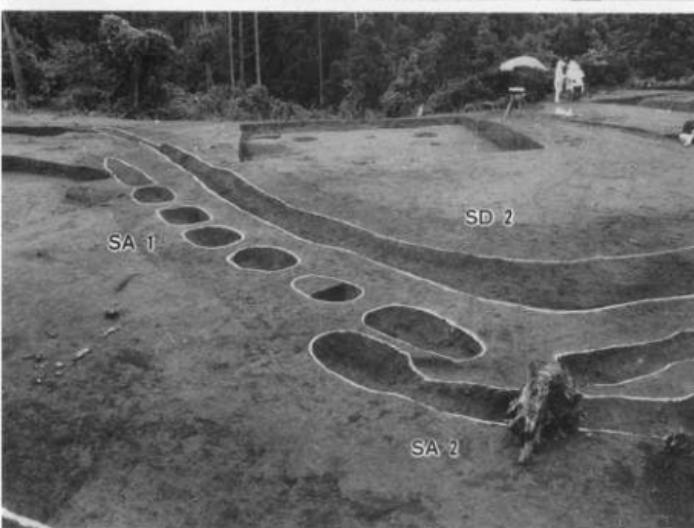
SX 3
主体部閉塞状況



SX 3
主体部掘形



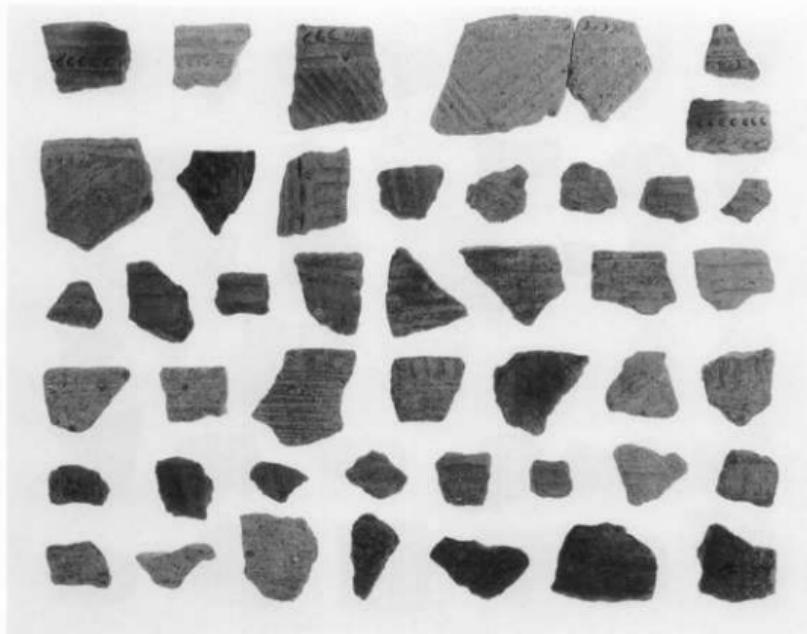
SX 4 全景



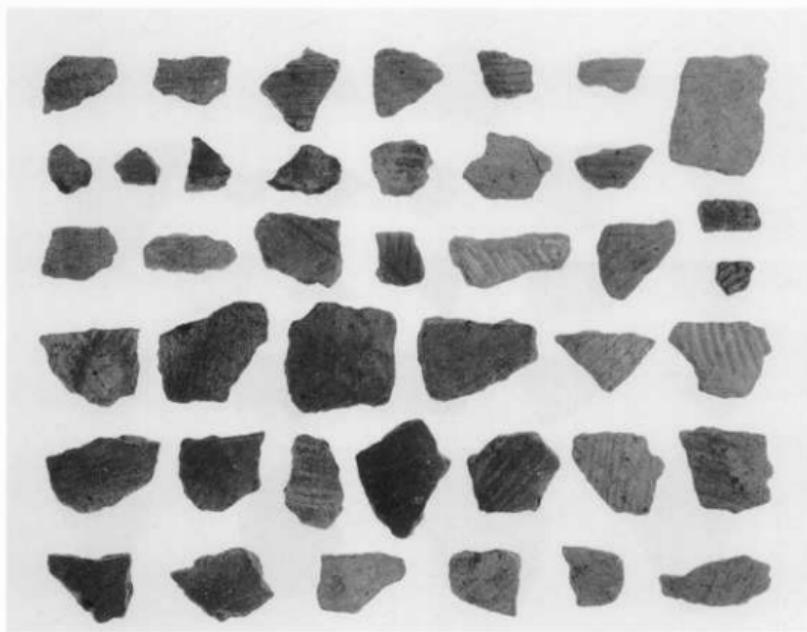
SD 2・SA 1・SA 2
全景



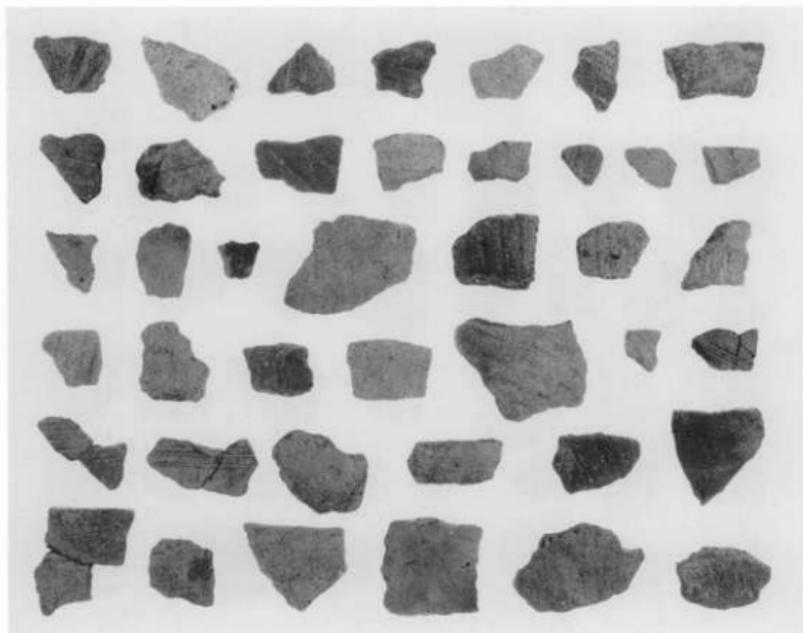
SD 4 全景



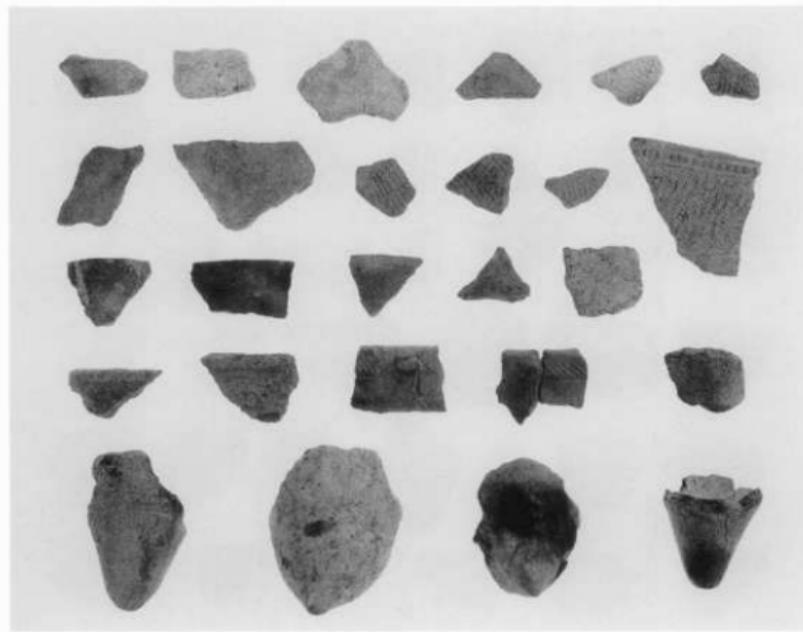
縄文土器（1～44）



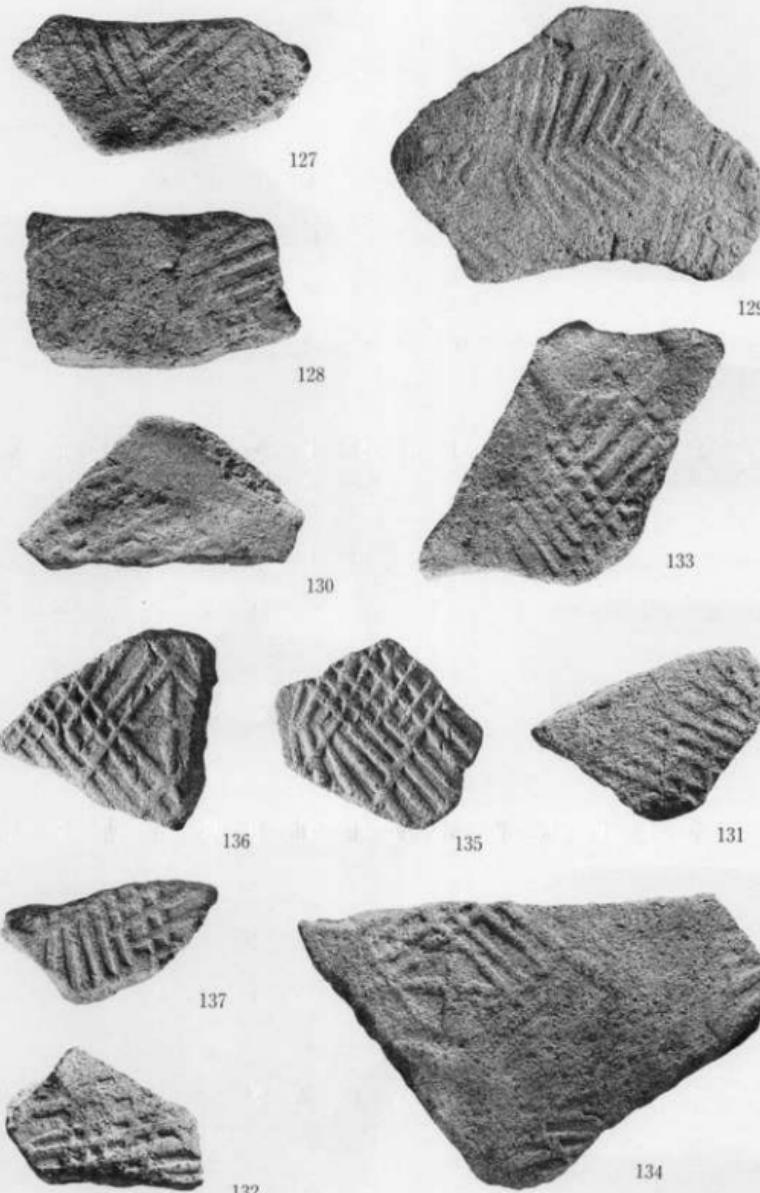
縄文土器（45～85）



縄文土器 (86~126)



縄文土器 (127~152)



押型文土器（縮尺：1/1）



SI 11-1



SI 3-12



SI 3-1



SI 3-2



SI 3-15



SI 3-3



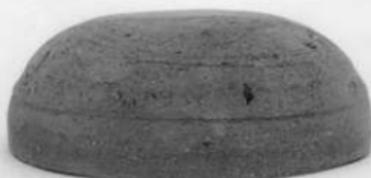
SI 3-14



SI 3-4



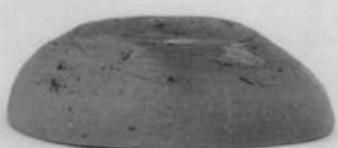
SI 4-4



SI 5-1



SI 6-1



SI 6-2



SI 6-3



SI 6-4



SI 6-5



SI 6-6



SI 6-7



SI 6-8



SI 6-9





SI 8-9



SI 8-8



SI 9-1



SI 9-3



SI 10-1



SI 10-2



SI 10-9



SI 10-4



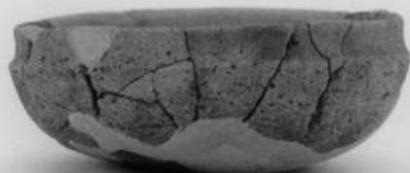
SI 14-1



SI 14-6



SI 14-7



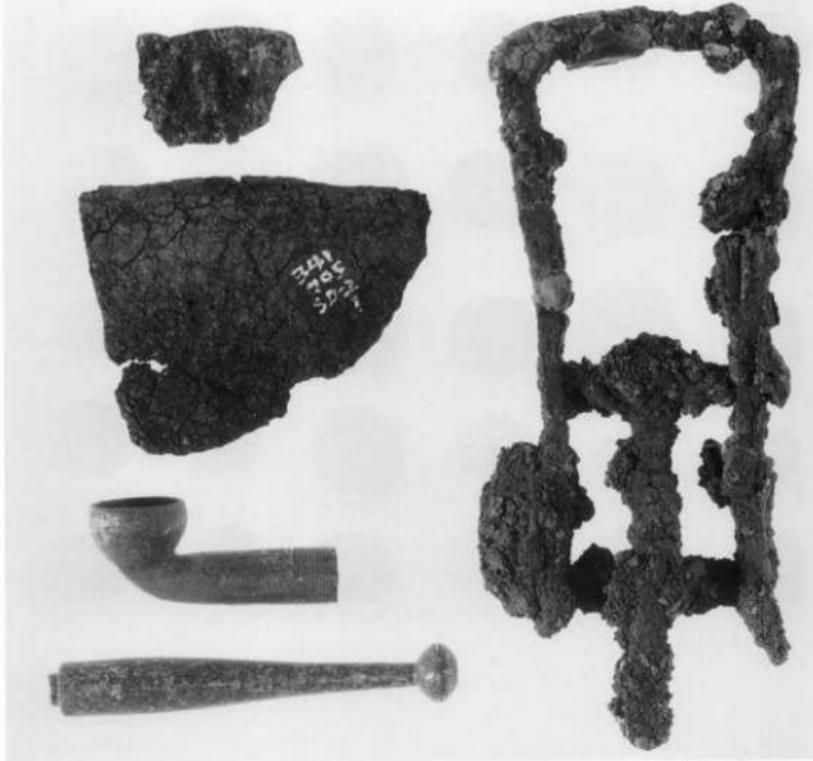
SI 16-3



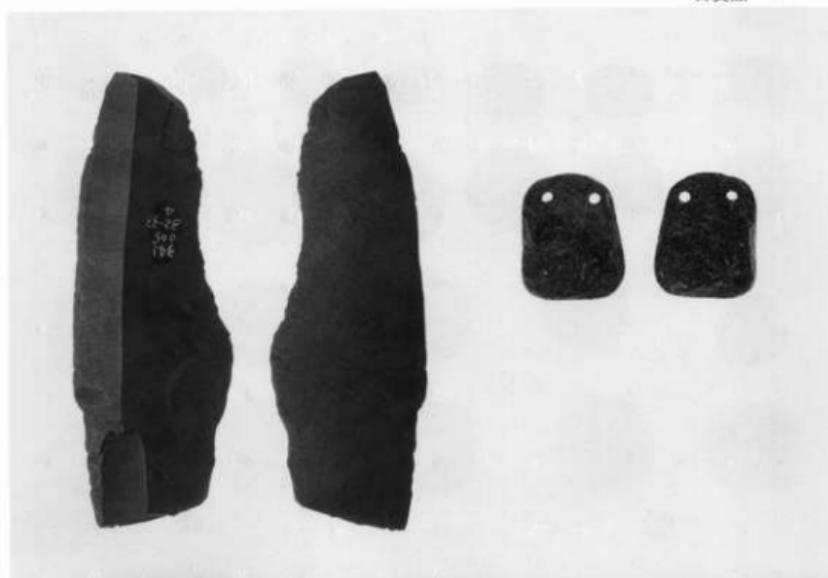
SI 17-1



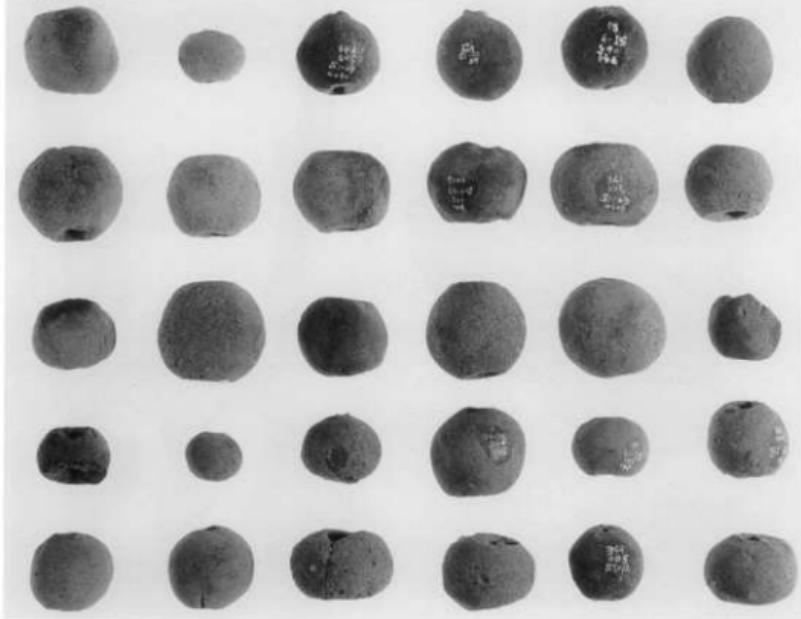
SX 3



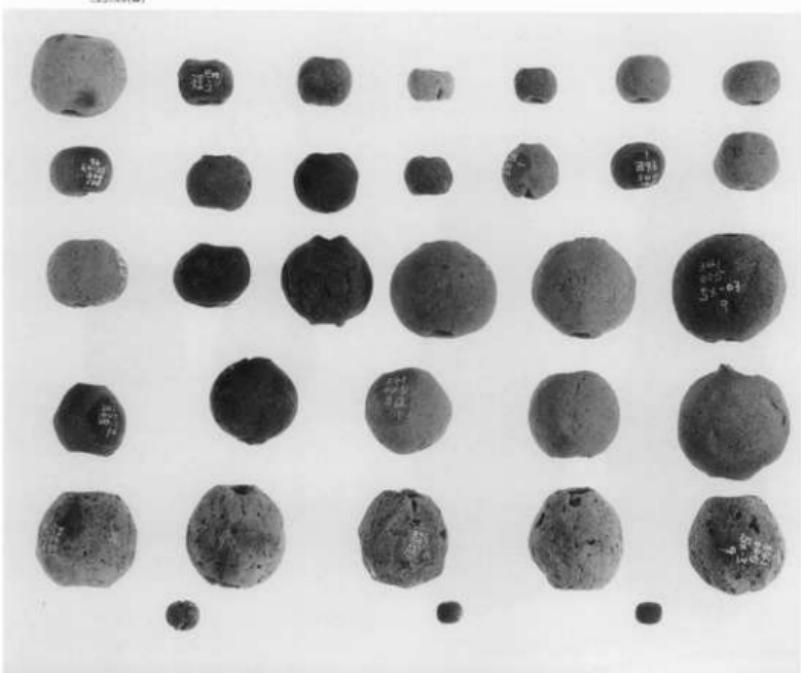
金属製品



石製品



土玉(1)



土玉(2)

報告書抄録

フリガナ	シモフサマチナガイナバイセキ
書名	下総町長柄葉遺跡
副書名	主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書
卷次	IV
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第251集
編著者名	萩原恭一
編集機関	財團法人 千葉県文化財センター
所在地	〒 284 千葉県四街道市鹿渡 809-2
発行年	西暦 1994年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
カガヤバ 長柄葉	カトウバンミツカガヤ 香取郡下総町 ナガハタヨシタケ 名木字木棟崎158 ほか	341	005	35 52 37	140 23 23	19870701 19870710 19880601- 19881130	120 1,248	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長柄葉	古墳	古墳	古墳(方墳) 1基	土師器・須恵器・馬具	終末期方墳・横穴式石室
	集落	縄文	古墳址 1基		
		包含層	1地点	縄文土器(早期沈線文主体)	
	弥生	陥し穴	1基	石器	
	古墳	竪穴住居	2軒	弥生土器	
	江戸	竪穴住居	16軒	土師器・須恵器・土玉	
	塚	経塚	1基	石碑	六十六部団國納経塚
		道路	1条		
		溝	1条	石製垂飾品、砥石、煙管	

千葉県文化財センター調査報告 第251集

下総町長稻葉遺跡

主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書IV

平成6年3月25日 印刷

平成6年3月31日 発行

発 行 千 葉 県 土 木 部

千葉県千葉市中央区市場町1-1

編 集 財團法人 千葉県文化財センター

〒284千葉県四街道市鹿渡809-2

電話：043(422)8811(代表)

印 刷 株式会社 正 文 社

千葉県千葉市中央区都町2-5-5